

119

636

驥尾日守教正著

日蓮宗實理全

報光社發行

符

020025-000-9

特18-521

日蓮宗實理

驥尾 日守/著

M28.12

ABH-0191



4

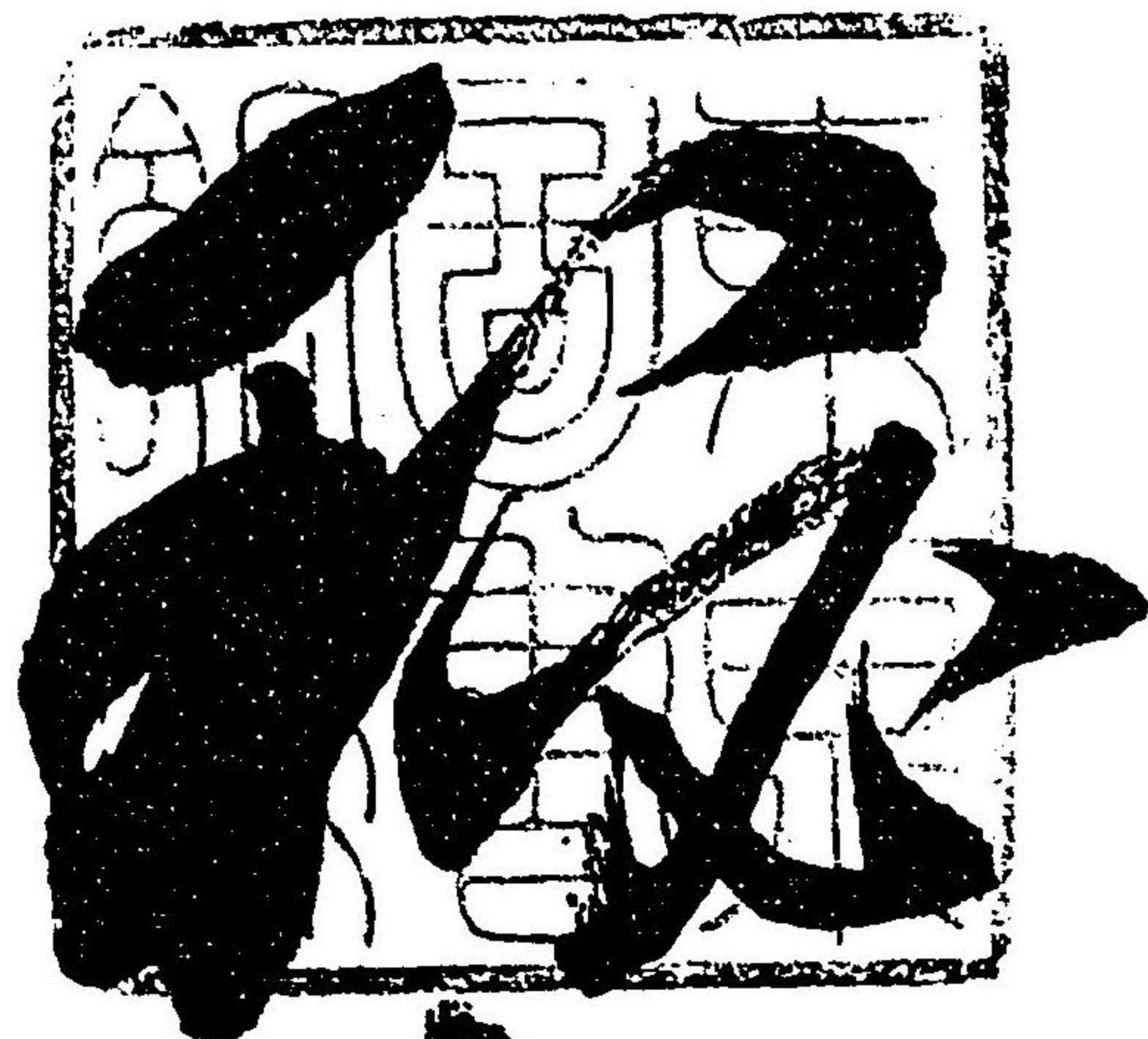
—

5

—

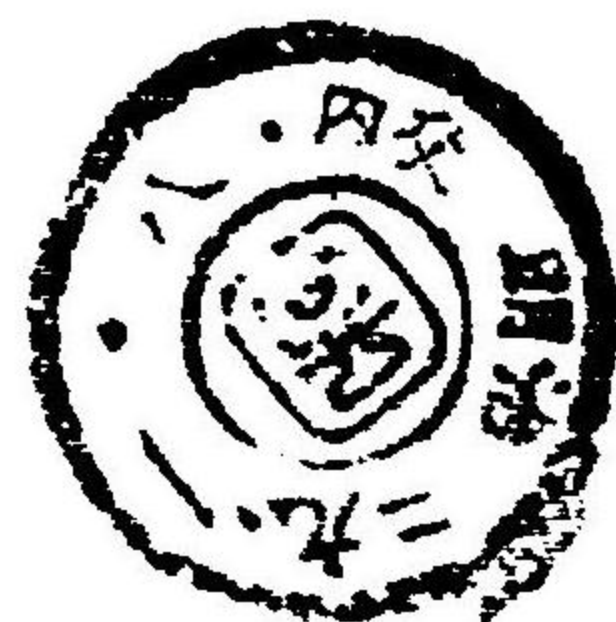
特 18

521



日

書





日蓮宗實理

井上哲學士

日宗哲學序論辨妄

凡例

凡 一此卷を日蓮宗實理と題し、又一名日宗哲學序論辯妄と稱す
一此書は内外大小相對の論法たり、三章二十節に合連して以て日宗哲學序論の妄信誤謬を糺明し、畢竟しては日宗家の法相純正哲學を知らしむ

附り圖を添ふ是れ當家の特色なり、觀者了簡を取るへし

例 一此書は本因妙純正哲學を告げたるなり、教相學に比して見るへからず、此書中に引証的據、其書名及び丁數を略するものは、素讀者の豫知するに約してなれば知るべし

(一) 一此書は緇素ともに觀るべき爲め、別して初心に之を要として、俗語平假名を依用したり、讀者了すべし

一書中に哲學序論の文句を省きたるものは義解の用なきを以てなり
 尙ほ未だ該書を見ざる人といへども評論上に丁簡を得べし殊には
 奥書の實理辯にて日宗の哲學を證知するに至る快々として讀むべ
 し

明治二十八年十月十八日

大日本帝國佛教日宗家

驥尾日守識

日蓮宗實理序

久遠名字已來本因本果の法主本地自受用報身如來の垂迹上行菩薩の
 再誕本門の大師我祖聖人御釋に曰く

法の邪正と師の善惡に於ては證果の聖人尙是を知らず況や末代の凡
 夫に於てをや等云云

亦御釋に曰く 教相の淺深を知らされは理の淺深を辨ふる事なし等
 云云

情々夫以みれば我日宗の如きは本地無作三身如來が過去世に實地を
 究竟し玉ひし其法相を傾掌し玉ふ上行菩薩が意脈を正さに紹繼し玉
 ふ佛意の法王家日蓮宗たり 猶亦顧みるに其法相付屬は甚懸遠にし
 て久五塵点劫の往昔にあり豫て當家は此元初の付屬を執つて今時出
 現應佛が相承は取らす是れ現社會へ日宗が出興する所以とするなり

(二)

此實相に就ひて觀察すれば當家日宗には、現證、文證、道理と此三箇全備せる宗教にして良どに佛立宗なるにも拘らずして是を眩惑し惱むものある時は正さに其佛意を亡みし其法滅を觀るもの、如し豈に是を不祥といはむや何ぞ是を恐れせさらむや今世既に釋迦滅後二千餘回を経たり其末法に及び如來の豫言に的據し地涌千界出現して如來絶待の教義法相を顯示し玉ひし其不可知なる實相實理に對向し以て世理の哲學上に是を審判證明を爲したりといふ已に日宗哲學序論なるものあり予是を閱るに完く日宗哲學にしては皮相にも届かず其講述の實相を糺すに於ては未だ佛教の淺深を知らず尋ひて理の淺深に暗ふして五段の相配に戻れり往ひては即ち外用家天台の教判にも影響し彌よ佛教の紊亂を看るものなり却て法相正しき日宗家の實理を隠没し大ひに宗教に邪義を醸すの情實を現はしたり何といふことぞ

實 理 序

(三)

實 理 序

や此の物怪は即ち無作本有の法相に雲霧の覆ふたるか如し是を不可と云はすむはあらず焉そ是を默するに忍ひむや是れ、宗祖に忌憚なりとす若し是を矯正せすむは日宗の瑕瑾ともいふへし翻つては佛教惣して彼の世諦哲學の下とに伏すの道理を悲しむ其亦畢竟しては天下國家に對し普く世界の衆機に應同する即ち、宗祖が義務の浮薄に陷るを憂ふ因つては今其哲學序論の卑屈を評論し以て日宗家の純正哲學を表示す爲めに此卷を日蓮宗實理と題す乞ふ是を讀むもの記者が理智の足らざる處あらば是に料足を加せよと云爾

明治二十八年十月十八日

大日本帝國佛教日宗家

驥尾日守識

(一)

次

目

日蓮宗實理目次

井上哲學士 日宗哲學序論辨妄

第壹章

第壹節

質疑先達意見

第貳節

宗祖御一期生間の佛眼實理

第參節

日宗哲眼哲學一目瞭然

第肆節

絶待教法華壽量の實相哲理証明

第伍節

(二)

現世出現三世了達聖人四哲證明

第 貳 章

井上學士妄信列舉

相承式評破

並相承指南

日宗哲學序論 第一段四節 一束評論

全 第二段十三節 一束評論

全 第三段三節 一束評論

全 第四段三節 一束評論

全 第五段四節 一束評論

全 第六段五節 一束評論

全 第七段結論三節 一束評論

次

目

第 三 章

日蓮宗實理

佛法一大世界論圖 第一圖 第二圖 第三圖 附リ講義

一念三千圖象

附リ 研究問題

以 上

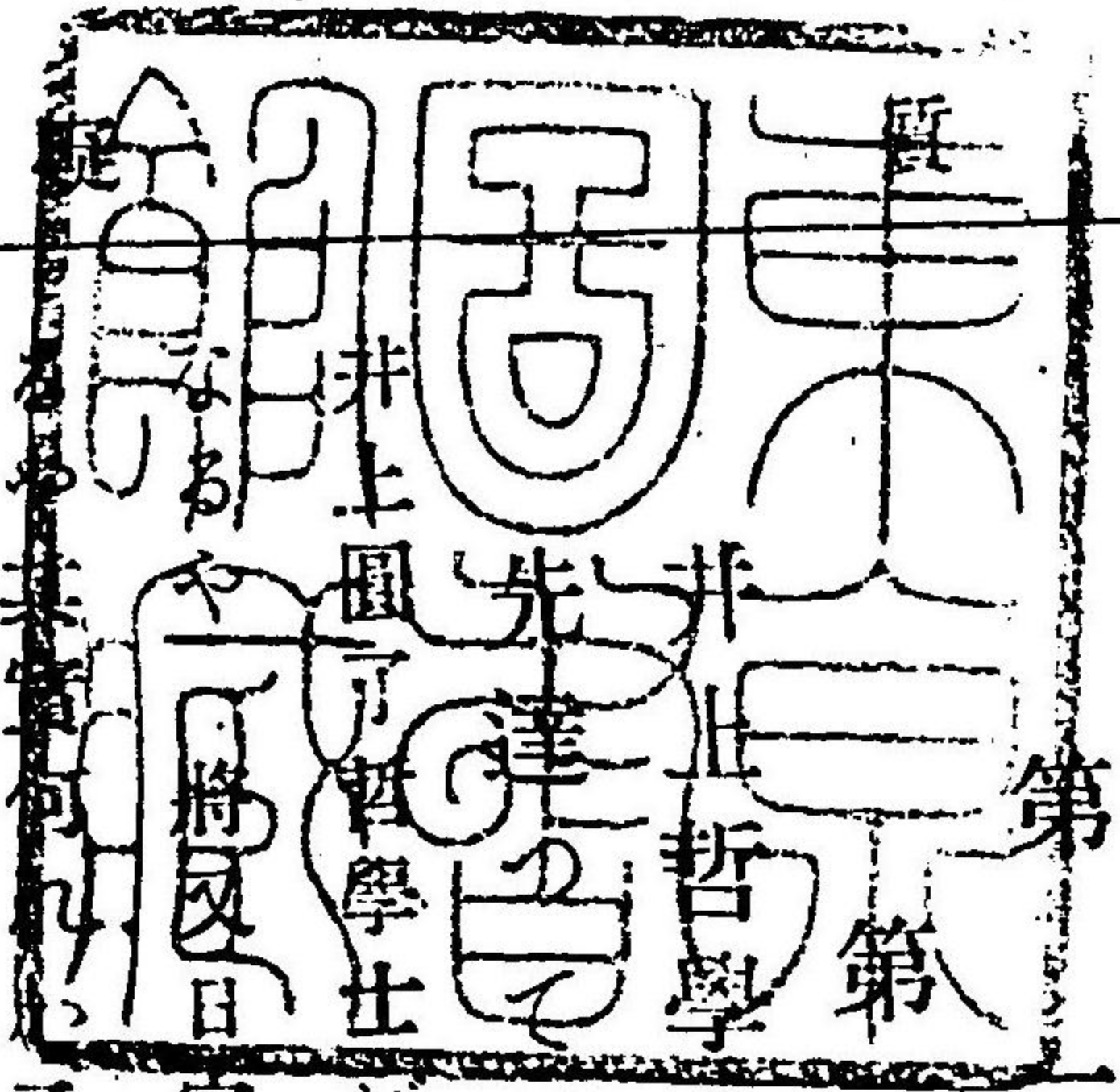
次

(三)

日蓮宗實理

井上哲學士 日宗哲學序論辯妄

驥尾日守著



第一章

第一節

井上哲學士が日宗哲學序論を質疑するに

予が意見を述す

井上圓了哲學士が日宗哲學序論を著して世に公にする精心や名譽的なるや將又日宗の今日冷淡なるに就ひて宗弘に鞭を入れたる者か予が智を以て是を了知せず 然るに學ばずして井上學士が日宗の哲理を審判證明するといふは予が大ひに嫌疑を構ふる處なり 其は曰く予は日宗實相家にして恒に法相を主とし即ち本時三佛が究竟の一念三千を奉して此哲學の外に十法界中に哲學有るべ

(一)

(二)

質

きなしと覺悟せしに何ぞ計らむ學士が日宗佛意の哲學を證明し是を
 審判すといふには甚驚怖したりといふにあり 學士知るや知らすや
 如何む 抑も久遠本時の二佛三佛は理即の凡夫より、名字、觀行、相似、分
 眞、究竟、と實修を究め其實成に騰致し玉ひて爾來常寂光を占め本因の
 法と本果の法とをバ保持し世々に其實相を示現して三益を九界に布
 施せる事は天地人の知見する處なり 此佛陀が究竟の實相實理に就
 て觀る時は既に十方界中の現象物、萬有一として本有無作の佛意因果
 の實相にあらざるなし是れ事實なり

疑

言を換へて言へは過去世に於て本佛が常住を究めて此世界は異動な
 き、有情、非情、にまて空理の物は一として無く亦萬物に於ては各々主宰
 者も實相に於てあり一切空なるものなし十法界に涉り及び三種に涉
 りても皆悉く實相なり常住の法相を帯ひたりと云ふ事なり

質

然るに今學士が著はす日宗哲學序論を糺すに件の現狀とは反對して
 學士曰く哲眼を以て宇宙を照見し來れば萬有一として哲學ならざる
 はなし日月も哲學なり山川も哲學なり草木も禽獸も人類も都て是れ
 哲學界中の現象にあらざるはなし等云々 何を以てか學士が所見と
 佛陀如來が實相見と其相異なる者は世人の迷惑する處なり學士が今
 佛意に返るとを云ふは何ぞや 苟も本佛に於ける十法界及び三種に
 涉り生死分段變易まで究竟して論なし 井上學士が携ふる哲眼哲學
 は纔かに人界一部上の想像哲學にして實地を究めたるにわらず覆載
 間の情、非、二世間を一束に空理に處し一元論の空々寂々結歸の哲學な
 り 焉ぞ三世了達究盡上の純正哲學と學士が所依とする哲學と對向
 すべけむや 争り日宗哲理と學士が空理と同日に論すべけむや是を
 顧みずして空理を以て日宗實理を審判せるといふは是れ何ぞ妄信の甚

疑

(三)

しきと云むや且らく予が意見を先んせば
 抑も三世了達の聖者が實哲は無量劫當初にあり學士が哲學は現世に
 始まりたる者なり 故に亡論學士が哲學は聖者の哲學の下とに就ひ
 て其哲理をば聖者が實哲に審判證明を求めざるを得ざるを知るなり
 其所以は肉眼は其慧眼に及ばず優勝劣敗當然の理なり何ぞ是を定理
 といはむや 然に學士曰く哲學は是れ萬教萬學の上に立ちて是を審
 判證明を看る哲學なりと
 右學士が佛教の中にも日宗に對向して斯く云ふ者は謬りなり 若し
 日宗が今世哲學の證明を受けざるべからずとせば 果して日宗は妄
 信宗なりとす其所以如何となれば 苟も三世了達の聖人が世々に照
 曜する實理に於ける衆機の有智無智と擇ばず有縁の機の前には世哲
 か紹介に因らば其人智の頂上を照らす事疑ひあるべからず

若し爾らずむは佛智を常寂光と云ひ一念三千とは名けざるなり何ぞ
 學士此の理を知らむや吁々 若し予が哲眼實理正當なれば學士が日
 宗哲學序論は斷して妄信といふこと動かさるべし是を日宗實理とす
 右は質疑に先立ちて論理を設くる事然かなり

第二節

日蓮聖人御一期生間の佛眼實理 (哲學の事)

教の淺深を知らざれば理の淺深を辨ふる事なしと云云

右哲理の意を解せば され文字の皮膚を觀る者は實哲にあらず法相
 の事理に宛て、哲學を證するにあらずれば正しき哲理を盡すことを
 得ざると云ふ義なり

是を換言すれば文字教に依らば一向に心理に入りて實義を要するに
 あらずむば哲學に届かずと云ことなり

大智度論に曰く 法相の如くに法相を説くを如來と名くと 正さに佛陀如來が哲學の實相是なり 佛教の哲理を取る者は如是くならざるべからず 此理に就ひて觀る時は未だ心理の實相を窮め尽さざれば良どの哲學にあるべからず過去無量劫より已來眞實の哲學者は如來一人なり故に如來を以て哲學を證明するを純正哲學と云べきなり 左れば如來とは哲學の主宰者たり哲理の尊形たり 日蓮聖人が如きは其れ如來の實相に準據して根本たる哲學を立て玉へるなり

其證文に曰く

此三大秘法は二千餘回の當初み地涌千界の上首として日蓮體に教主大覺世尊より口決相承せしなり今日蓮が所行は靈鷲山の稟承に芥子の相違もなき色も替らぬ壽量品の事の三大事是なりと

右は蓮祖が出世の本懷たる哲學にして一期生間振張し玉ひし法相にして本有無作の實相哲理かりとす此哲學に憑りて觀る時は 宇宙間れ万有現象一として三秘實相にあらざるのなし 亦た此哲學を以ては三世常住に世界の非情有情に照らして此二世間が此哲學に合はざるはあし是れ現世に此哲學の顯れたる所以なり是を日宗家には名けて一念三千は實哲といふなり 蓮祖本時三佛か口決の哲學を懷中し玉ふ事を證して曰く 教主釋尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相傳し日蓮が胸中の肉團に秘して隠し持てり左れば日蓮か胸の間は諸佛入定の處なり舌の上は轉法輪の處喉は誕生の處口中は正覺の砌りなるべし斯る不思議なる法華經の行者の住處なれば争か靈山淨土に劣るべき法妙なるがゆへに人尊し人尊さかゆへに處尊しと申すは是なり

右相承の哲學をば門弟子に傳授して曰く 日蓮か一門は正直に權教の邪法邪師の邪義を捨て、正法正師の正義を信ぜるゆへに當牀の蓮華を證得し常寂光當體の妙理を得ることは本門壽量の教主の金言を信して南無妙法蓮華經と唱ふゆへなり云

亦高尙なる哲學を傳授して曰く

己心の妙法を本尊と崇め奉つて己心の佛性を南無妙法蓮華經と呼び喚れて顯れ玉ふ處を佛とはいふなり

亦曰く 末法に入りぬれば餘經も法華經も證なし唯南無妙法蓮華經なるべし此五字に餘事を交しへばゆゝしき僻事なり云云

右に証する哲理に順つて事行するに及ては正さに其法相に即して神通妙感應妙利益妙あることを

蓮祖か傳授して曰く 大地を指さば外るとも虚空を繫なく者はあり

とも大海の塩の満干ぬ事はわりとも日は西より出るとも乃至假令ひ智慧は愚かなりとも戒徳は備らすとも法華經は行者の祈の可はぬ事はあるべうらず南無妙法蓮華經と唱へ奉れば必ず來りて守り玉ふべし云云

亦曰く 天下万民諸乘一佛乘となつて妙法特々繁昌せむ時吹風枝を鳴らさず雨壤を碎かす世は穢農の世となつて今生には不祥乃災難を拂ひ長生の術を得て人法共に不老不死の理り顯れむ時を御覽せよ現世安穩の證文疑ひあるべからざるものなり云云

亦曰く 他國侵逼難自界叛逆難の御祈禱にも此妙典に過ぎたるはなし令百由旬内無諸衰患と説れたればなり云云

亦曰く 王臣一同に三祕密の法を持ちて有徳王覺徳比丘か乃往を末法濁惡の未來に移さむ時勅宣御教書を申降して靈山淨土に似たらむ

最勝の地を尋ねて戒壇を建立すべき者哉時を待つべき耳み事乃戒法といふは是なり一閻浮提の人の懺悔滅罪の戒法耳みにあらず梵天帝釋等までも來下して踏み玉ふべき戒壇なり等云云

右は末法万年の外までも下種機の堪ゆる處まで事行すべき無作の哲理を告げたる者なり

對 外 策

- 一 第一義悉檀
- 一 世界悉檀
- 一 爲人悉檀
- 一 對治悉檀

以上は既に

宗祖か一期生間施行し玉ひし對外策といふなり(對外策とは學士か設けし名なり) 當家には弘通の善策と名稱す常には是れを四悉檀と唱ふるなり

對 内 策 (學士か言なり)

- 一 内外相對 (佛教と (世界諸餘の教理と相對す
- 一 大小相對 (大乘教と (小乗教と相對す
- 一 權實相對 (佛說四十餘年の教相と (八年に教相と相對す
- 一 本迹相對 (本佛と (迹佛と相對す
- 一 種脫相對 (本因妙と (本果妙と相對す

以上は既に 宗祖か門下に傳流し玉ひし教相にして是を常には五段の相傳とも相

配ども唱ふるなり

掲表する。四悉檀・五段の相對乃如きは本來本有にして 蓮祖か作用を
るといへとも無作の法理たり即ち法相の性質より出て、法相に相即
する者あり是を無作とす貴としく

上來は日宗家の自行化他に涉ての妙用即ち是を不縱不橫乃秘密藏と
稱する哲理なり

日蓮聖人御一期生間の施設は實哲爾かり所弘の法相を表示すること
は且らく爰に畧して向ふに至て證すへし

第三節

日宗哲眼哲學一目瞭然

蓮祖曰く 始め寂滅道場より沙羅林に終るまで三變四見等の・三土・五
土・は皆是れ成劫の上への・無常土・に變化する處の・實報・寂光・安養・淨瑠

璃・密嚴等の土なり能變の教主涅槃に入らば所變の諸佛隨て滅盡す
土も亦以て如是し今本地の娑婆世界の三災を離れ四劫を出てたる常
住の淨土なり佛既に過去にも滅せず未來にも生せず所化以て同體な
り是則ち己心の三千具足三種の世間なり等云云

亦曰く 俱體俱用無作の三身當體蓮華佛とは日蓮か弟子檀那等の中
の事なり是則ち法華の當體自在神力の顯す處の功能敢て疑ふへから
ず敢て是を疑ふへからず云云

右本有無作の佛法の所見にして無始曠劫よりの佛陀如來斯の觀心よ
り出るにあり

件に表示する處の 蓮祖か垂示の法理をば世人一般是を見聞するも
唯觀念を教しへたる者と耳み了簡を置ひて實地に是を活用せず果し
て理性所具を語りしものに今日まで成行たり哀しむべきの至りなり

何ぞ是を實行せさらむや。逆相か告ぐる所以のものは正さに一念三千實理を教しへたるものにして既に顯觀し玉へる處の三大秘法の實義爰にあり。若し此實哲今世に興行せまむは世界中自他の不幸なり既に掲げたる兩文證の如きは觀念を告げし名聞にあらす此を三種に施して其一念三千なる實否を試みざるへからん是を事行一念三千と教しへたり法華の世に出るや此妙理を知らざるへけむや蓋し日宗哲眼哲學の純正なる事は右示すの如く一目瞭然なりといふ

第 四 節

絶待教法華壽量教の實相哲理を證明す

抑も世人もつぱ一ら法華壽量教を誦するも唯文字訓に委ねて其實哲を辨へて義讀を要する事を専用とせざるは即ち如來う悲歎し玉ふ處ならむ若し此義讀か今世に行はれされば法華の妙味無き者の如し唯文字

を六万九千三八四字に作用したる佛語といふまでにして四十餘年未顯眞實といふは此六万九千三八四字の事を告しものといふに止まるか如し

天台か文字を唯だ讀誦して觀心なきもの宛かも蛙か鳴くか如く木偶乃踊るか如しと釋せしにも髣髴して良とに此壽量の佛意實理の愈よ隱没するに至るを憂る者歟。爰を以て今世は此壽量の實義か必用なるを衆機に布施して國家的の情實を振張せざるへからん是れ法華持者の責任にして即ち如來に盡すの義務といわんや此れ身に宛ての哲理なり

夫れ法華壽量品とは文字にわらず又佛語にもわらずして恒に文字に義を藏くして壽量品と唱ふるも是れは之れ佛意の秘密語にして正さに

如來か實相を云ふ者なり 故に經文の事にはわらす素より經題の文字にはわらざるなり 是を簡易に表示せば 本有無作三身如來とて本地難思にまて始終無く本來本有の即五蘊世間と、衆生世間と、國土世間と此三種世間に俱體俱用とありて座をさせる處の所謂ゆる情・非・二世間の體宰主と稱する佛意如來か其實體尊形を即ち因と、果とに判別する時の其容相の名稱を法華と唱へ亦壽量と唱へ其法華の實相中にて華の中に於て因と果との色心をは分けて其實形を證するを壽量品と義名を唱る者なり

是れ良に本來本者に座して常寂光に徧し即し玉ふといへども此の如來を衆生は知らず佛性は十方法界中の衆生心理に住し玉ふと諸餘の經教には説明して是を見聞するも未曾有にして實相を觀見せざりしか此壽量教說法の時に於て始て十方法界中即三種世間界中より右語

る處の 法華壽量の如來品の實相尊形か御出現ありしなり 故に其說法會中の九法界の衆生は件の尊形法華壽量品如來をへ辱くも拜觀し其法法相の無始常住なるを拜聽して以て此法華壽量の光明に照らされて九界一時に本有の一佛法界に心理が歸入したりと云ふり壽量品の功能なり

是を妙樂大師は開迹顯本皆入初住と釋し眞實の斷惑は壽量の一品を聞く時なりと釋せり即ち既に辯する處の如し疑ひなきは 蓮祖聖人が親たり此實相證の法相には關係者に座をして現に我朝に出現し玉ひて件の實相を觀心より顯し玉へり取りも直さず壽量の三大事即本門三大祕法是れ壽量品と云ものなり法華といふ實相なり會て法華といふ文字に付すへきものにならずして佛意如來の實相なり壽量といふ普通如來の容相にあらずして其身は三身如來たり三身は即ち

一身たるなり然ふして實相印を章し玉へり是れ壽量品の尊形なりとす

右を法華壽量品の實相證の義解とす 是より入文に進入しては此功德を義釋する段取となるものなれとも此一段に盡すへき由緒なければ當品の今世に緣由あることを發語したるが此説明の主旨とす然ふして此品の哲理と云ふものに於けるや一念三千か哲理なり其意は此壽量品は十方法界に渉る哲理なればなり況や人界一部も此壽量品を外れたるものにあらすして現今末世社會の人衆に對向して此壽量品と片時も忘るへからざる實理ある處か即當品の哲理といふ其哲理をは短簡に示さは 現在顯れ出たる宇宙間の万有現象物は正さに法界徧有の壽量品より出てたり 壽量品も不生・不滅・なれば其法相に相即して現宇宙間万有・非情・有情・皆な悉く・壽量・社會・の實相あり・不

生・不滅・なり 此實理より取りて觀る時は恒に此壽量品と隔別せず互ひに徧し即するか一念三千の容相にして正さしく法華の活動といふ此妙理を興したるか即 日蓮宗の純正哲學とす 今此結歸に宛ては是を法華壽量の哲理とす觀者宜しく注意せよ法華壽量とは教理若しは文字にあらす教理文字を何ぞ今世に必用とせむや

此法華壽量か 本朝に興ふるに起因して辱くも法華壽量の妙理一念三千に影響して倍々世智文明に進化して法華の實哲を衆人か身に感染するに至る是れ法華壽量は文字にあらす他人の者にあらすして即社會吾々に所有しあるものなり此れ一念三千佛意法界の所有たり自受用報智明聖の薰發する種智なりと又知るへし 右を絶待教の法華壽量品實相哲理の結歸爾か云ふ

第 五 節

現世出現三世了達聖人四哲證明

● 印度出現

一 釋迦文佛

● (應佛昇進自受用報身如來

右は九界提携脱機應同して出現す

● 支那出現

一 天台大師

● (迹化菩薩權現

右は熟脱衆機に應同して出世す

● 日本出現

一 傳教大師

● (全上

吾宗祖曰く釋尊と天台と傳教と此三聖の如きは内典の聖人と釋し

玉へり

● 日本出現

一 上行日蓮本門大師

(本佛垂迹自受用身

右は秘密の權化なり本時の寂身を以て法報二身を薰陶する聖哲界の元祖なり

件四聖か稱道する哲學哲理なるものは即一念三千にして十法界に互りて即す即ち佛教社會の最上要用たるものなり

第 二 章

井上圓了哲學博士が日宗哲學序論の妄信を列舉す

(妄信とは理學者輩が言にして理に合はぬといふことなり)

日宗哲學序論に曰く

本宗相承

哲學士曰く本宗相承に二つあり内相承外相承是也外相承は印度支那日本三國に涉りて弘傳せる導師を云ふ内相承は直ちに本宗に依憑し正さしく法華經法師品神力品に依り多寶塔中本門内證眞實の法脉を相承する導師を云ふ左に其導師を表示す

相承

外相承

釋迦牟尼佛 印度
天台大師 支那
傳教大師 日本
日蓮大菩薩 日本

内相承

釋迦牟尼佛
上行菩薩
日蓮大菩薩

此二箇中本宗は内相承を以て正意とす
以上

相承評破

右糺明するに頗る事實に相違して論するに足らず抑も相承師を擧げて其相承の何物を告げず亦相承師の實相を告げず有名無實なるが如し
今是を短簡に表示せむ され外用相承とは是を換言すれば經卷相承といふ事にして惣して云は、釋迦一代の教々の皆以て外用なり此相承の場所は法華中囑累品なり當時付屬を受けたる人は本化、迹化、大小乗の諸菩薩惣付屬を受しなり但し其付屬の教卷を以て佛滅後正像、二千年の間に小乘、權大乘、法華經迹門、等れ四依れ菩薩は佛勅に因りて御使に出現す其遣使を指して且らく外用相承の師と稱すること爾かり
偕て法華迹門の四依の菩薩は正像に互りて出現す指圖の如し

正法千年間迹化の四依及び像法に互りて出現す

●外用相承師

釋尊五十年の說法相承

南岳大師	支那出生
天台大師	同
章安大師	同
妙樂大師	同
傳教大師	日本出生

左れば外用とは教卷一切の事にして且らく心理の外用とは品を異にするなり正しく佛陀の言説なり

一内證相承是を言を換へて云はむに別付相承として此場所は既に神力品にあり其内證なる者は秘密にして語るへからずといへとも

蓮祖が觀心に依る時は本佛が佛意の内證の因果を指す此は之れ迹化の菩薩等に決して付屬せず是れは教卷言説にあらざるがゆへなり即ち是れは本來本有にして佛陀如來が心理の一念三千なり(十界互具の理を云ふにあらす)

●相承指南

靈山付屬・内・外・相承左圖の如し

靈山淨土多寶塔中第一義諦開迹顯本會上

●本因本果の法主本地自受用報身如來直授

●(内證相承) ●(久遠本眷屬上首

附り大法・教・觀・二箇

別付口決末法弘教先陣

●(内、外、二箇壽量大法付屬) ●(地涌千界上首上行菩薩

法華神力品付屬如是し

右は久遠顯本の法相にして化他教相機情的の法門には似るへくもな
ま荷も

●(上行菩薩

●(無邊行菩薩

●(淨行菩薩

●(安立行菩薩

本地の二佛三佛が自行の法相なり故に壽量といふ上行菩薩に稟承し玉ふ良に所以あるなり

●靈山淨土第一義諦會上

●(本地二佛三佛無作三身如來

(應佛昇進自受用報身

●(即祕密釋迦牟尼佛直授

惣付屬

(外用相承師

●(本化迹化大小乘經四依之の諸菩薩

●一代教相付屬を指す

●法華囑累品付屬式如是し

●本佛二佛三佛の遣使

(内證相承師

●(本化上首上行菩薩再誕日蓮大聖人

神力品付屬

並三聖爰に畧す

付屬品物

(内、外、二觀一念三千壽量

右は法華神力品付屬を顯觀す

夫れ本化の上首は寂滅道場にも來り玉はま雙林最後にも訪ひ玉はす爾前述門の教相にも列り玉はす唯本門八品の說法に來現して直ちに座を立ち玉へり是れ何事をや正さに知るへし今世末法の衆機に應用する佛意内證の一念三千を本佛より受領して爰に出現し弘教せむが爲めに出現し玉ひし者なり敢て外用稟承に必用なきを知るへきなり然れ共囑累品惣付の記名上に其關係ある者の如し畢竟しては別付に對向上は共要する所なし唯觀心絶待を主として教相弘通者にあらざ

相 承 指 南

る。か。ゆ。へ。なり。別途に是を論せむとす
 次に迹化の菩薩は迹佛の御弟子にして教卷付屬を專要として正像に出
 出て、熟脱を利し玉ふ既に南岳天台妙樂傳教等其責任にして御一代
 教相の大綱綱目を論究し外用相承の義務を果し玉へり
 左れば天台家は教卷相承家なり外用相承の師なり當家日宗は佛意一
 念三千家なり内證相承の師なり
 本化迹化は本來本有にして性質異なりて相承に別ある者なり
 本化は恒に佛意に離れず迹化は教相に付帶す
 右は今世一端の事實にあらす世々に涉て爾りとす 因みに云ふ當家
 日宗に於ける其法相(心理、因果)教相(經卷の)現在其縁を異にして其亦台家外
 用を當家に所用するものは他なし彼の久遠本時の自行觀心を顯本す
 るに近き前佛の教卷を一時宣揚し玉ふ條例あることは天台の釋の如

相 承 指 南 (九二)

し爾して其教相用事とせるに就ひて教相明知の君子を撰はさるへか
 らす爰を以て 蓮相は且らく天台をば外用の師と仰ぎ玉へる者なり
 内、外曲共に内智を薰發する前には依師師を用とするは恒なり其依師
 師を天台傳教に求めて遠本の自行觀心を振起勃興し玉ふなり此故に
 蓮祖は台家の釋を依用し教相を宣揚し玉ふ此謂ひなりと知るへし
 曾て祖師が爰に出現し玉ふ其日より顯本し玉へる法相(本佛自行の、因果を指す)は台
 家に紛れなく判明せり其所以ハ當家の法相が今世に出現することは
 年限までも經文に詳記せり故に迹化四依は是れに賛成して先見の證
 を置けり是れ正さに教相と法相との差異を告げたり殊に台、當、兩家の
 所弘の別を判知するに足る者とす
 完、經、記、釋、疏、等に證跡明々たるにも抱はらす是れに反して 其事實
 の相違せる相承を揭示し及び我が日宗をして天台家の末葉たらむが

如き相配の爲し方は殆むと學士が誤解を見る者なり宜しく當家の宗致を探究して其淵源を亂すことなかれ

日宗哲學妄信を評論するの 本論

日宗哲學序論 第一段 緒論

第一節 開端

第二節 本宗の哲理

第三節 本宗の理論門

第四節 本宗の應用門

右四節を一束に評論す

抑も學士が第一節開端の哲學に曰く哲眼を以て宇宙を照見し來れば

万有一として哲學ならざるはなし日月も哲學なり山川も哲學なり草木も禽獸も人類も都て是れ哲學海中の現象にあらざるはなし人皆云ふ佛教は宗教なりと予曰く佛教は哲學なりと人亦曰ふ日蓮宗は法華宗なりと予曰く哲學宗なりと是れ予が世人と其見を異とにする所なりと

予評して曰く井上學士が日宗哲學を證すといふにも抱らす右述ふる處の開端の語の如き僻見を如何む學士知らすや
日宗は本來本有の佛法宗なり法華宗とも云ふへし何ぞ佛立宗を曲けて世人を惑はすが如き事を云ひ聖者が興出したる宗教をは凡夫宗教と同一視して世諦理に齎しからむが如き哲理をは講ずるは妄信と云はざるを得んや 苟もそれ日宗の如きは今世出興の佛教を發揚したるにあらず 久遠本地の無作の心理一念三千といふ高尚深絶なる實

相心理家なれど其法相の名體五重玄にして凡眼哲理の必ず届く處にあらず其門に入ての所觀たるや萬有悉く一念三千ならざるなしと識見を立觀する純正哲學に對向して學士が如き空想の哲學は毫も適せずといわむや 學士日宗の哲學を講せむとならば宜しく法相を調らへて是れに合同して同致に歸する哲理と判證すへし 學士が開端の語の如き哲眼哲理を以ては日宗の哲學は宛かも天月と水月との差違よりも亦廣大の遠を觀る者の如し妄りに一念三千實相の妙理をして空想一元論に陥入らしむることなかれといふ 辱も日宗の法相の如きは特り日宗の法相にはあらずして人間社會一部に起因するも普く九法界に干涉して本來本有絶待無二十方世界中其人が所有とする實相觀の法相たり豈に知らざるへけむや此土の有縁甚厚の教主本地圓佛の如きは過去世久五塵劫當初にありし時を觀るに薄地の凡夫に

して現世界の如き有形にありしが其身を以て其宇宙間萬有をば究め初め玉ひて久しく業を修して竟ひには其所有ゆる心理といふ者も色相といふものも一切萬有窮盡し玉ひ其究竟の末は皆な悉く其究竟物をして法分の位に至らしめ自己の色心は法主の位地を占めて其究竟の法相(の心理)をば十界三種に徧し以て爾來は是を法界衆機の爲めに示現して其實相を證し其儘に告げ玉ふ亦化他に出て、其劫數は既に五百三千塵劫と云ふにあり是れ即ち法華の實相なり爰を以て其最初久修業より騰致し玉ひし聖釋迦を本佛と爲し爾しより已來た十方分身三世諸佛も是より無量に所顯して說法し本佛迹佛共に常寂光に居しては十方法界の一切の有情も非情もそれ實相となつて共に一念三千なり 件に宣ふる所の實相点より觀見哲眼を下す時は曾て宇宙間萬有一と

して空々寂々の者有ることあり一切以て一念三千なり 學士是を伺はすして空哲を語り出しては 日宗の法相即法華は有名無實となるへし空理と實理と如何して相對するや虚實の差は如何かなる哲理を以てすとも恐くは是れ佛智に届かざるべし 法華の前には空理は斷して嫌ふべきなりそれ佛說四十二年の間は無實相を説く是れ正さに空あり後説八ヶ年にして實相を顯示す正さに法華是れ實正の法相なり此故に法華實相顯本しては爾前の空相をば取らざるなり空相を取て何の詮かあらむや思はざるへからず

學士が空理を主とするものは他なし本地の佛法の實相を未だ見聞せざるか故なり 殊更に日宗の法相の如き者は文字法華にあらす一念三千の事なれば外見には知るべからず實相に就ひて實義上より哲學を取らざるべからず 是を探究すれば十重顯觀の妙相なり實學に就

ひて是を凝修せざらむ限りは 底蘊は知れ難し文相には其實理を知る事能はざる者とす乎か哲學を證することを得るといわむんや却て法相の輕侮を忌憚する處あらむとす謹まざるへけむや

學士が曰く日蓮宗と天台宗と哲理の由て起る根源を同ふするも其方向及び應用的を異にし表裏全く相反する勢をなせり哲學上より是を觀れば兩宗共一元論なり理想論なり等云云

右評して曰く學士が識見頗る誤謬あり學士未だ台、當、兩家の佛意の實を知らずして妄りに斷言することなかれそれ 台、當、兩家共法華宗なり何ぞ宗號の義を知らむや法華とは佛意、因果、を指す兩家共に並常因果、を宗とすれば一元論にあらす一念三千、法華宗なり 然らば是れ理想論にあらす實相論なり何ぞ是を曲けて理想論といふは如何亦佛意究竟實相を以て是を證する時は一元論とはいわるべからず其實は

蓮華宗にして並常の因と果とに互ひに即して曾て是れ因も果より出でず果も因より出でず並常にして一元論とは名け難し其故は法華より即して絶待なり本來本有なれば三種に相即しては一切法華といふ哲理なるがゆへに斷して、台、當、兩家共に一元論を宗とする哲學わなさまのなり況や理想論なし宜しく實相に準據して倉忽なる妄信を語ることを止められよ

兩家共に壽量教實相證に憑るなり然りといへども 當家は實相を以て淵底を盡して今日應用に的す 台家は其實をは觀に瀰みて扱はま唯文相の起盡をは應用す是れ兩家の間に實際を異にする教觀の違ふ所なり正さに如來より付屬せらるゝ實品に因りて作用を一如にせず是れ無始無作の實理とする所なれば敢て諍ふべからざるの論理なり夫にも抱らざ其奥底を叩かずして不當の哲學を表示して衆人を惑は

しむる僻見を如何に現在壽量教の法相に適合せざるなり學士更に一考せよ

次に學士が應用的部門の哲理唱題成佛の一段は莫太なる愚見にまて論するも足らず 實際に學士が未見未聞に出るものゝ如きか 今是を表示せむに 抑も妙法五字は文字にあらす法華經の題目にあらす本來釋尊一代說法の大躰にして直接に指さは正さに如來の法相なり其意は佛陀如來が實證の心理を指す此妙法五字の爲めに本佛が所顯し本佛所顯の爲めに述佛惣して如來が所顯したり 此所以に妙法五字を以て諸佛護念といふ其意は若し此妙法五字無かりせば佛陀が尊形を觀見せず惣して法界中成佛の容姿を見ることを得ざる程の大事の佛陀の種子たる妙法五字なれば是を無量義とも佛所護念とも唱ふる心理實相を指すものなり 妙法五字の甚深奧藏といふ義味爰にあ

り 殊更に當家に立る所の妙法五字は本有無作にして本時を尋れば久遠本佛が凡夫地の時に已心より顯觀したる實相證を直ちに移して法界三種に適するを起首したまふ活潑心理の妙法五字なるを以て法華の教題に比すべからずとす 文字音聲を同ふするがゆへに恒には題目と通名を稱するも實相に照しては霄壤の差も管ならず深妙の上法に位せり 故に其の義を知らず其法相の出生する所と亦其の實相を伺はせして妄りに我見を主として如來の奥藏を訐ひて法界の一念三千を輕賤するなかれ それ

宗祖が曰く 本地難思の境智の妙法は迹佛の思慮に及ばずと釋し玉へり今世に宗祖が出興し玉へる妙法五字は本地の如來が本懷より出たる妙法なれば稍々迹佛が思慮分別の届かざるを告げられたり 況や薄地の凡夫が識見すること能ざる所なりと云わむや 上行の蓮祖

が世に座まし玉はゞ大笑し玉ふべし委しく向ふに至て論ずる處わらむとす此一大事は聖智の境界にあらざれば了簡すること甚だ遠しといへども日宗の一念三千の門を叩かは亦知見すべし宜しく能學者に就ひて習ふべきものなり學ばずして何ぞ是を輕易に知ることを得べけむや 全体學士が日宗をば今世始顯の宗教と管見し以て 蓮祖が新機軸なむと併見を下し法華の何物を知らずして哲學を論究するといふ間違より此くの如き行誥る所あるものなり

天台曰く不識天月但觀池月と釋し玉へり學士此破責の穴に陥ちて可ならむや吁々

日宗哲學序論第二段純正哲學門第一

第五節 三大界の存立

第六節 三大界の中心

- 第七節 佛教の三大界
 - 第八節 佛教の唯心論
 - 第九節 佛教の理想論
 - 第十節 眞如と物心との關係
 - 第十一節 眞如と我人との關係
 - 第十二節 眞如開發の説明
 - 第十三節 平等と差別との關係
- 以上

右評論するに學士教相の淺深に暗きが故に亦理の淺深にも暗きものなり其所以如何となれば正に知るべし今也學士が日宗哲學と問題を表して實相哲理を少しも語らず空理を以て實理を味沒せしむるに齋しからむが如し

前第一段は既に表したるが如く妄信なり
 今亦此第二段の科目を見るに佛說小乘の理にして爾前四十二年の單空理を語るものなり法華實相の前には逆戻りの空理を語るの哲理となつて日宗實理哲學に對向しては宛かも夢覺めて後ちの物語りの如く其應用するの實なきを如何む 曾て是れ日宗哲學は強慢にあらざ
 純正哲學は特て日宗にありといふ
 其意は上み久遠を徹し下も今日の釋尊が絶待の實哲を取るが日宗の哲學なり其故の 宗祖曰く在世の本門と末法の始めは純圓一同なり
 云云と釋し玉へば今日は佛教上に則らは正さに法華壽量教の教理に合同する處が即日宗の哲理なることわ今の文證に明かなり何ぞ是れを曲會と云はむや然るを 完く佛教の純正哲學門を證する日宗家の哲學を證するに於ては爾前小乘の單空以て語るときは宛かも佛界の

社會へ凡夫社會の談を接するが如し論ずるの限りにあらずと云はむや、學士が此一段の科目の説明と斷して日宗の哲理に合はず尙前四十二年の經教の説相なり與へて云へば法華の皮相上の説なれば日宗哲理に至て論究すべき科目に非ず天台の云く皮膚毛彩は出て衆典にありと日宗哲理は大綱宗なることを了知せよ學士は法華の皮相をも猶を不可知的なり況や日宗哲理に合同せんや、若し此哲理が必用とせば却て法華方便品の百界千如の理性所具の哲理が勝るべし此科と相對して觀よ、果して方便品の百界千如が實かに高等を占むるなるべし其百界千如をして、壽量絶待より空理と破廢せしむることを以ても知るべきなり甚だ此一段の科目の哲理は、日宗家の痛歎する處にして感服せざるなり、故に科目上に評論を入れ結駁せず文相上に立入て義論せずと知るべし

日宗哲學序論第三段

第十四節 權實開會の説明

第十五節 本迹開會の説明

第十六節 眞如一元論の結果

右三節を概して評論す

夫れ開會とは興廢の義なり、實に一方の權を廢して一方に實を興し以て權をして實と會せしむ是れ正さに開會なり、開は權を開し會は實に即會せしむるをいふなり何ぞ世人は此義に順はざるや如來の所説に違する者なり既に、釋尊說法するに法華已前には六道の心理因果異性を説く、完く是は權なり其後ち諸佛同道開三顯一即法華を説く此時は現に十界の心理を説いて已前を非とし因果同性を説示す爰に知ぬ前に因果異性を説くは即ち權なり後ちに至て十界の心理因果同性を

顯示するは前權を開し後實に會する法相の然るなり何ぞ是を虛妄といわむや正さに開權顯實なり 良とに衆生に心理の因果を説示するに於けるや漸々權より實に入り亦佛意に入りては迹より本に進み次第漸入其實相法華に登位せしむる興廢は法相の儘の開會なれば諍ふべからずして諸佛の同道といふ然るに漸く權を開して實に會し實果を成して後ちに誰れか廢權説を執るものあらむや此くの如き哲理あるべからず何ぞ開會に暗さや學士皆誤れり され權實開會本迹開會といふことは教卷を破開しよる事にはあらず心理が次第に騰致したることを開會といへば少しも教卷に破廢を論せず教卷を棄捨することを取るものは開會の誤解なり法華の心理實相より爾前の圓を開するは心理未だ卑少にして佛意一念三千の實を觀ざるがゆへに引いて法華實相圓に騰致せしむるの脱成を會とす 然りとはいへとも學士

が此一段の開會説明は心理に涉らず教卷破立の説明なるものゝ如し是を實理と誰れが證せむや 其上へ又學士が台家の釋に今圓昔圓圓躰無殊と釋するを觀て爾前と法華と其圓躰無殊と云ふ事に誤解せしは笑ふべし され今とは今日出世應佛の釋尊が脱成せしむる爲めに説き玉へる今日の法華を指す昔とは中間大通れ熟の法華を指す蓋し今昔の異はあれども其圓體は同一にして無殊といふなり 是を本迹釋には已今本迹といふなり 若しそれ學士が説明を信とせば爾前の不成佛と法華の成佛と無差別と云ことに歸して謂はれなき哲學といふべし吁々

佛教を學ぶ者は實理を取らざるべからず爾前四十餘年には成佛の現證なし法華の説法に來つて十界平等の成佛を證せり是を一念三千の成佛とす現に爾前と法華との成佛不成佛の相を諍ふなり何を以てか

圓体無殊と云ふや圓已に異也
 宗祖が曰く 九十五種の外道は佛惠比丘ガ威儀より起り日本國の謗
 法は爾前の圓と法華の圓と一なりと云ふより始まれりと釋せるなり
 今外用の上には教相の高下淺深を論ずるも心理の論法に入りては斷
 して今日は無教とす若し天台家に入りて義論せば教相外用嚴重にし
 て四重の興廢一方も譲らず糺明して學士が開會説明は破責すべき義
 なり 蓋し佛教は何をか證とするそといへば文字を教ゆるにあらす
 して唯だ心理一面れ説明教なれば忽ち九界の心理をして佛意に隣る
 ことを説明し絶待教を尋驗ひるが正さに佛教に有縁の人の要する處
 なるへし 今世は佛教の末法に及びて開會論は天台家過時の詮議を
 する者の如し之れ日宗哲理の取らざる處なり 宜しく時機を計りて
 佛在世發迹顯本れ上への絶待を要すべし是則ち日宗哲學の爰に興る

所以とし國家の必用なり開會説明觀心の前には宛かも去年の曆を調
 ふるに異らず學士希くは今一重に立入ての開會論の哲學證明に協同
 われといふ
 次に學士が本迹開會といふは、間、違、なり既に天台釋に據れば本迹約身
 約位と曰ふなりされば開會すべきよふなし 何となれば如來が一身
 の當躰中にて本迹を辯別することをいふものにして是を 換言すれ
 ば如來の心理中よる本時の如來が顯れ出て本時の自行の因果、即法華
 を顯本したりといふことが本迹の興りたる所以なれば是を開會す
 べき仕方ひなきものなり本迹のことは開會といわす顯本といふべし
 其意の迹佛が一心より一念三千の如來が顯本して正さに其實相をば
 一會の大衆に觀見せしめたり然かも本佛と迹佛とは判然したり是を
 ば壽量品と説かれたれば本迹宛然として本迹一にすることもならず

不可知的の本迹なり 若し本迹一とすれば法相を亂すなり 現在心理の本迹にして法華の要たり其上へに本佛が十妙と迹佛が十妙といふ心理の實相妙ありて覆藏すべからず亦本佛の弟子あり迹佛の弟子あり本佛の淨土と迹佛の淨土とあり本佛即迹佛あむとは云へき實理あし三世諸佛が證明する實相印あり殊に發迹顯本の砌りに本佛が脇士本化の菩薩顯現して本佛の證を告げ一會の大衆爰に於て本迹を了簡せり左れば本迹の妙法は經文の廿八品前後を分けていふものよわらず佛陀が心理如來の本迹を論する者なり正さに知るへし法相上より取りて了簡するときは一個人の心理中にも宛然として本佛の心理と迹佛の心理と本迹あるあり 夫れ一念三千の如來本有修徳の三身が已心にならるべからず探究すれば必ずあり是は即本佛なり尋ひて本有性徳の佛性は迹なり然かも本迹嚴然たり是をして開會し是

を一にまること得をべからざるは心理法相の然る處にして實相に就ひて判明すべきものとす 法華壽量の大切なること爰にあり本迹のことは已に 天台家非常に文證論を嚴にし玉ふ 當家日宗の實相上にて本迹を論究す教相の沙汰の今日末法の所用にあらざる蓋之此事を宗祖釋して曰く 本迹の高下淺深勝劣は今之を用ひせと云云 是れ日宗は觀心實相家にして教相に依用なきものとする証票なり學士が本迹開會の説明は事實相違するは勿論なり其亦今日に必用なきは日宗の哲理と學士が識見と相背く者の如し曾て曲會にあらず法相の然るを如何せむや本迹開會の説明予は甚感服せず 次に學士が眞如一元論の結果といふ一段を考量するに文字と思想との説明なる結論にして未だ其實相を示さざる者なり其所以は一元論をいふも其實相を示さず文字思想耳み眞如にも其眞如なる實體を示

さす唯口實に止まるといふが如し是をして若し實相家に云わしめば單空といわむが佛在世には聲聞緣覺單空を觀したれども法華實相上にて竟ひに脱を得たるなり實相にあらざれば佛教の實無きことは今日釋尊在世の二乘當機衆の身体に就ひて觀見すれば明らかかなり然るに

釋尊が四十二年間は眞如を説くも一元論を語るも理想説にして實相を證せず終ひに脱成の際に望むて九界一時に一念三千實相を觀見して萬法の實体を知り眞如の實体を了簡し一元論の主旨をば知覺せしに至りしなり是を開迹顯本の實相といふなり此實相より照見する時は學士が此一段に於て語る眞如一元論結論は佛教の單空結歸に住する者と云ふに過ぎず今日宗の如きは學士が語る萬法眞如一元論の各々文字理想に浸潤せずして直接に實相を証して眞如を説き萬法

の實体を示し一元論は事實を告る處が本宗の特色にして曾て學士が理想を語に似ざる者なり然に何ぞや學士が日宗の實相をも伺はずして暗に單空理想論を日宗哲學に是を冠ひらしむるは實に黙し難き哲學にして予が痛歎して止まざる處なり惣して學士が説明論は日宗の哲理外にして宗祖の本懐とは相反して畢竟如來の悲しむ處なり佛在世には二乘の空を觀し菩薩は假を觀し如來は中々を説明し以て其實相常住を九界に示せり爲めに第一義諦を以て脱を得たりとしるべし是れ三世常住に空假二諦の壞滅せしを知るに足れり其實相か法華壽量品なり其壽量實相を末法の今世に顯したるか上行再誕蓮祖爰に出現せる要旨たり其實相なる者は萬法の本元及び眞如一元論の實体証にして今世の空假二説を斷つ妙用の尊形即蓮祖が興して依用とする處の三大祕法是なり宜しく是を照見して必き常

住の眞如一元論を執るべき事か一世界人衆の爲めに必用なりといわ
む耳と

日宗哲學第四段

第十七節 眞如一元論の應用

第十八節 宗教弘通の方規

第十九節 三大秘法の説明

右三科の哲學を一束に評論す

抑も蓮相と天台大師とは本來本有にして其源を異にして出現し玉へ
は曾て 蓮祖が天台の山嶺より宗教を流出したりと學士か此一段に
見る者は甚僻見なり 若し假りに學士が言に隨はゞ經釋共に妄語と
なるべし 仮令ひ爰に宗祖が出現して台家の學窓に入り台家に依師
を求むるも正さに佛説に自己が佛智を照らし是に境智冥合するは凡

破

評

評

破

智の與り知らざる處にして妄りに放言すべからざる處なり 素より
學士も知るが如く 蓮祖も天台も權者なり兩聖共に宿智を薰發して
佛智を弘むる聖人なれば凡智より看破して宗旨を興せる者にあらざ
れば其興せる法相と其能弘の人と人法を驗らめて以て現狀を洞察し
其源泉を知るべし未だ法相をも驗らめずして皮相上を以て聖者の境
智の出る處を推及するは餘り危忽と云はざるを得ず現在佛教の證文
に適せざるを如何む豈に是れ台當兩家を輕賤せし慢痴といわむや
夫れ台家は法華の法師安樂の説相に據れり法華經一部を專用とす
當家日宗は勸持不輕の明文を身に帶ひて本時三佛が十方法界に應用
する一念三千佛意を心理付屬より興して今世に其儘振張す 現在其
成立ち其法相の源本既に異にせり宗祖自己に一宗と作出せしにあら
ず佛勅本佛が奉命の權化といふことを伺はずむば日宗の哲學講説は

無益なりとす 若し爾らずむば法華の壽量神力の明文忽ち身有に屬し往ひては 釋尊一代經皆悉く反古なるべし學士經釋に適せざる哲學を施設することを止めよ

次に日宗の眞如一元論の應用は既に

靈山會上にて實相印を證したる遠本法華の哲學一念三千事行是あり是は今日靈山が始顯といふにあらず本有無作にして常住なり蓮祖佛勅として末法無教の時に際しては芥子程も違はず一世界に布施するが是れ日宗の眞如一元論の應用にして三世に動かす無作なりとす是を以て學士が説明を照見するに宛かも有作なり常住實理に適せず二佛三佛が正さに實相印に抗抵するにありて日宗家の應用哲理と覆藏する者なり有作は甚感服せざるなり宜しく佛意と伺ふて唯今の必用を取るべき者哉學士が此一段の企策が法相に適合せざると憂ふる耳

み

次には日宗の三秘をして學士が本宗の宗教門の原理と思ひ 三秘は是れ法華本門の道理を適用して宗教門を開立せる者なむといふ者は甚だ僻見にして日宗を凡夫宗教門と見認めたる者の如し 上來の評論にて事足れり今爰に語るは無用の如く聽こゆるに似れども完く日宗は此三大秘法宗にして一大事なり故に屢々同し事を言とざるへからずそれ苟も 蓮祖が佛勅は此三秘にあり然るに今や日宗哲學を講説する哲學士が此三秘の大事を下とに拵ひて餘計なる空哲を自作して日宗哲學と云ひ餘りに此三秘を日宗の原理なむと云ひ陥として本門の道理なむと曲會するが如き者は感涙押へ難しと云はざるべからず學士が日宗哲學を講説せむとならば此 三大秘法をバ實體に立て宗致の哲學を證せざるべからず此一段の哲學にて忽ち日宗哲學は

死物なる者の如しといわざるべけむやそれ
 釋に曰く雖讚法華經還死法華心とは是なり 蓮祖が一期生間身を生
 死の外とに出で、運動し己に王難を被り玉ふものは他あり此の
 三大祕法の爲めなり日蓮が身の爲めの三祕なれば宗教門所立の原理
 とも云ふべし我

爲君、爲國、爲一切衆生、及び一世界の人衆が爲めとして、顯本の實相大
 法をして理に屬し亦は本門の道理を適用して此三祕宗教を開立せし
 なむと、は戲談を甚しきと云わむや吁々 學士が現在人に施す哲學
 か空理なれば人も亦一切爲すを空理と見解を下すは當然と云へど
 も本來世の中に空といふ物一物もあるべからず是れ佛家の實哲なれ
 ば世理と自から見識を殊にする處にして一切空より物の出る其理な
 し理といふものは不動なるものにして物を爲すものにあらざる物を爲

すものは空理の外にあるへし世人一般是を知らざる者の如し
 日宗の哲理を講説する人は第一に之と了知せざるべからず是と若し
 知らざる時は法華を空理と爲すの過ちか出來すべし法華を唯理と
 見る時は價值なき者なり多くは世人空理の佛教受持者たり
 予か執る所の者は絶待心理の實相を今世人衆に宛て國家に宛て、要
 用を爲す安國的の其實用を共する實體に取て聊かも空理の取らず現
 に學士か語るか如き理は會て妄信と斷言するなり 若し學士か哲眼
 の三大祕法なれば今世に少しも用をなすべき所なく唯理物なる耳み
 其實は諸餘の宗教も同一の理に、陥るがゆへなり
 予が論ずる處は依怙にわらず世界の爲めに是を論ず
 身輕法重死身弘法の蓮祖が慈物に對して是を悲しむといふ豈に世人
 知らむや今爰に

蓮祖が顯はしたる三祕は一世界中の衆生が已心の佛性の實果を觀見せしめたる實相なれば本門の道理にあらざり蓮祖は事行なり已てに

宗祖曰く 天台傳教の御時は理なり今は事ありと云ふ此事なり何ぞ今世に對し理を要せむや現今一世界の急用に宛てて此儀に利用するは特り此三祕にあり故に事行一念三千といわざるべからず是れに就ひて 多寶如來は皆是眞實と證明し十方の諸佛は助舌を審判し本佛二佛三佛一切實相印を合同したる諸佛戒の三大祕法なり此本來本有の佛法の大事をば争か理に属せむや思わざるも甚し

右語るが如く學士が所見此實理に的せず世人日宗哲學序論の空理の底を叩ひて文字上皮相論に身を縛せられ空理に本有の心理を奪れむとに注意せよ 當家日宗家の三大祕法は辱も法門は釋尊一代五十年

に涉り其實体實義は此三祕に顯すといふ重大なる法相なれば虚理に心得べからざることを肝要なり

次に學士か曰く其祕法の体は壽量品の三身常住と云へる法門に本つき其法門を妙法蓮華經に攝束して等云

評して曰く全体に人の口眞似を要する時は果して物の起盡を立派にせざる者なるか今の學士か哲理に因る時は宛かも 宗祖が三祕を自作し妙法五字も自作して無作のものはなく有作の法門といふに似たり學士か壽量の如來とは法門といふわ笑ふべし 果して三如來が法門なりとせば其三如來は無形佛にして理といわむ者の如し又常住といふを以てみれば所在もなきこと能はざるものゝ如し何れに其所在を求むるや告げざるべからずといふの論理が起立すべきなり 學士日宗の哲學を判明するといふにも抱らば何ぞ如是き奇怪を語るは如

何む 學士か奇怪を語るといふものは他なし壽量品の何物三身如來の何むが爲めに常住なるを知らず亦復た妙法五字の何物を知らずして無謂きことを自作して言ふか故に是を奇怪とす それ天台は教相家なり壽量品の疏釋と學士が哲語とは適合せず甚だ衆人をして惑はしむるの哲學にして 蓮祖の手前大ひに是を耻つ學士此義を如何ひ妙樂の曰く 壽量品の佛を知らざるものは不知恩の者と強責す亦曰く 於諸經中秘之不傳云云

天台曰く 分身既に多し成佛の久しきこととと證明す

宗祖曰く 一切經の中に此壽量座まさずんば天に日月なく山河に珠なく人に魂のなからむが如しと明示す

聖者皆此壽量品と尊重す

予か今爰に説明と出さば 壽量品の三如來とは十法界中の心理及び

三種世間に互りて住し玉へる實相三如來にして常住とす換言しては一念三千の佛体尊形といふ是れなり理物にあらず實相あり

傳教の曰く 一念三千即自受用身。自受用身とは出尊形佛と釋せる是あり此自受用身の因果の能徳に依て見る時は現世界宇宙間の万有悉皆活理を包含せる其本地を知る者なり若し此一念三千の佛尊か顯れずむば宇宙間の万有か活智心理の實體と知ることなし此壽量三如來の爲めに始めて宇宙間の情非二世間の体其本有なるを了知するものなり爾り然ふ迄て是れハ久遠本佛第一番成道に顯れ世々に傳りて諸佛是を顯し玉ふ其實相証されば佛教を習ふもの智學の君子としては是と覺知し奉せよといふ即ち上に證する 天台、妙樂、傳教、日蓮、四聖の御指南なり須らく是と知るを佛者と云佛智を得たる者とするなり

今日 日宗家に弘導する處は爰にゐるなり爾るに學士是を不沙汰に

して日宗哲學講說するを悲しむ所詮信せざれば此要を知るべからず
學士か此三祕を觀ては宛かも隣家の寶と算ふるか如き耳み何ぞ哲理
の届くことを知るべけむやといふ

次に學士か三祕配當の了簡を評論せば 本門の本尊は心に念し 本
門の題目は口に念し 本門の戒壇の身に受持すと云ふことを 身口
意三業と、戒定惠三學の、配當に節約したるものと考察するに粗は
理屈的にして不可といふべくもあらざといへとも中々に如是き輕操
的の者にあらざるなり 倩々三大祕法抄の底意を伺へば頗る義味高
尙深絶にして初心のものは其意を得べからずといへども要するに此
三祕實修の如きは斷して機情的と離れて一層重意に立入り所謂ゆる
久遠本時の如來か自行を遊されたと移すの義味にあり故に 今の
學士か配當に信を置ひて修せば浮薄となるへし冀くは一念三千の成

佛に近き實理を取り信を置くべし是れは能師に就ひて習ふことを要
す 其意は此三祕を修するの念慮は佛名を唱ふるとは大ひに義を異
にするものにして即ち是ハ諸佛戒なり 此の三祕を懐くには三人の
教主を奉する主義もあり唯是れは初心の者よ於けるは學士か配當に
依らずして一束に以て觀心に置き已心の三祕とすれば外れざるなり
予う敢て學士か説明をば許くにはあらざれども 若し此説に泥まは
果して實理を失ふを恐れてなり依て今爰に一言を置くのみ此奥意は
向きの實理編に譲る

日宗哲學序論第五段

應用哲學門第二

第二十節 唱題成佛の疑難

第二十一節 題目の意義

第二十二節 心理上の解釋

第二十三節 宗教上の解釋

右四科の節目を一束して其義を論評す

評

抑も妙法五字の何物を知らざるものは法華經の何物を知らざるものなり 法華經を知らざるものは尙更に妙法五字は了解しかたきなり 右何れか一方を知らば両方完全して知るべきなり 一方を知つて一方を知らざる道理なく 一方を知つて一方を知らぬといふものは完く両方を知らざるものなり 宛かも佛教を知りて成佛を知らざるものあるべからざるが如し 佛陀如來を知れりど云つて未だ其實相を見ずといふもれなきが如く 若し是れ人の其名を知るといへども未だ其人を知らず其名稱を知つて其人を知らざるは即有名無實といふにあるか 右道理に就て考へ見る時は學士が完く法華の名を知りて其實妙法五字を知らざるは件の比例に似り何ぞ日宗哲學を講説する

破

評

破

人にして未だ妙法五字の何物を知らずして疑難を自から構ふるは其謂れなきこと何を以て是に譬へむ畢竟して日宗哲學を無形に歸すべし吁々憫れむべきかな 今爰に日宗の唱題成佛に就ひて予が義解を表示せむ 抑も學士か日宗の唱題成佛を疑ふものは一理なきにあらざといへども其出處を糺さざるは甚不調法といふべしそれ 蓮祖が教相法華の普通號を假借して恒には題目と名義を稱するも完くは羅什翻譯の經題の妙法五字を興して唱題を勸めしにあらざることを行習はざるべからざ 日宗に興行する題目といへる者は人々已々に所有せる無始本有にして心理に狭める妙法を教ゆる實理の者なり 是を佛意一念三千の妙法五字と唱へて經題にあらざ一個人の心理の妙法を示教する爲めに題目といふなり 其勸むる意は自他同一の妙法を修する一迷先達の所爲なり是を換言すれば 宗祖が先づ自己の心

理中の妙法を顯觀して他をしても唱へさせしむるの義あり 故に此妙法五字は 宗祖か自行化他に渉る妙法といふことを承知せざるべからず 偕て日宗所顯の妙法は經題にあらず文字にあらず有作にあらず其實は觀心とて凡夫か境界を離れたる識見に成立つものなり 重々不可知的の心理なりとす爰を以て且らく題目の名唱を出てたりとすなるなり 此時は題目といわず 唯妙觀といふべきなり 蓋し心理にあらずむば妙觀と名くべからず 偕て題目を唱へて成佛せし人の現證を求めざるべからず 今是を求むるに 辱くも此土の有縁甚厚の教主たる本地無作三身如來が如きは名字の時に始めて己心より本有無作の妙法蓮華經をは顯はし是を取て本尊として信念口唱し終ひに己心の佛性を喚興して其佛性を二佛となし玉ひたり 是を自行の因果を満足したりとす 偕て自行を満足したる上は化他といつ

て宛かも世間に於ける學者か一切學を結了したれば其他の人に教施するが如く是も亦爾の如し 其因果の身を以て一切世間には是を稱道の爲めに二佛の心理を亦垂迹し應身を發表して三身即一を示現し其三身を衆生に説き教ゆる説法か取りも直さず即今日も靈山に顯出たる釋尊が所説の八箇年の法華經なるもの是なり 是れは之れ其乃往の化他の第一番の儀式を亂さす 世々に出現の諸佛は皆以て移し玉ひ前四十二年の後には必ず佛法の根本法華を説法して其本佛が自行の因果の實相をバ示現せしむるなり 其法華を説法する儀式は何れの佛陀も少しも異義あることなきを以て法華方便品には如三世諸佛説法之儀式と説く即是なり 偕て此方便品に於て百界千如理性所具の一念三千を説法するも迹佛が説法なれば當分の究理上を明す而已にして未だ其一念三千の實相殊には本有の三因佛性の尊形即ち上に

云ふ二佛三佛の其種因と其實果とを觀を彌よ時機到來して正さに爾前と迹門との迹佛說法を拵ひて開迹顯本とて上に云ふ久遠本時化他の始まり第一番の時の法華實相に戻して壽量品を顯す是れ開迹顯本の其謂れにして爰に本迹の起盡が立へし。 偕て壽量といふことは上來述べざる如くにて本佛の功德を詮量したることなり。 偕て其功德とは即ち本佛自行を遊ばしたる因果を云ふものなり。 偕て其因果の容相は如何といへば既に宣へたる久遠當初みに二佛(本佛)名字の時に己心より顯觀し玉ひし心理の妙法蓮華經が實相究盡の寶塔となりし則ち東方より來現ありし開顯壽量品の上の多寶如來が保護し持ち來り玉ひし寶塔中の本有の皆是眞實の妙法蓮華經是なり。 是れを取りも直さず本佛二佛尊か顯出たる實因とす。 本佛が本尊として離なし玉はざる妙觀なるを以て。 久修業の間に如是き實相か塔となりし者

なり。 是れは究竟の實相なれば常住不變なることをは知らざるべからず。 偕て右示したるは實因にして此次には。 實果を云わさるべからず正さに知るべし上既に云ふ本佛か名字の時に件の本有の妙法五字に對向せし名字の時の己心の佛性あるものあり是れは是れ。 件の本尊を修するに隨て喚ひ顯れて即ち二佛となれり其容相か正さに塔中妙法五字の左右に座し玉ひて法華の因果を說法し玉ふ多寶如來と釋迦如來と此二佛即三佛是れか名字でありし時に己心に蘊在し玉ひし佛性にして其時は唯佛性と喚ひしか妙法に呼ひ喚れて顯れては其佛性か多寶如來と釋迦如來と二佛に實相を究竟し玉ひたり。 是本有にして無作の尊形なり是即ち既に云ふ實果でありけるなり左れば釋迦が名字でありし時の己心の妙法五字は既に皆是眞實の妙塔實相となれり。 己心の佛性は己てに多寶釋迦の二如來となりて。 實相に顯

はれ出て尊形をば示し玉へり 件の如く観る時は現在に因果の二法
(心理尊形)人たるもの一人として備へざるはなく顯せば顯れざるはなし
爰を以て此實相を世々に出現する衆生に教示する爲めに諸佛が是を
說法するは即法華經なり 正さに知るべし經文は説法の音聲なり
上に宣ふる處の妙法五字と二佛三佛は説法する因果の實相即心理の
尊形なり 世人豈に知らむや 法華とは文字にあらす今指示する處
の妙實因妙實果此因果の容相を法華といふなり 即ち法は妙法五字
の因を指し 華は即二佛を指す 此法華をは説法上には二佛か壽量
と説けり 此壽量は心理の佛意の因果なれば因果離れざるなり 即
蓮華なり 正さに知るべし蓮華は共に因果を具足せり 故に聖人は
を並常因果と唱ふ數々無量の名あるも顯示實相上の尊名法華と唱ふ
るか實理なり 爾り然ふして最初の唱題成佛に立戻りては 既に法

華を顯本したるは名字の聖人にして現證聖人か己心に有在せるを自
から觀出して本尊と爲し是を唱へて即ち口唱より起首して己心の佛
性二佛の心理尊形を得玉ひ即因果満足の結果を常住に顯し不變に衆
機に應同訓示し玉ふものは萬劫無窮の名譽なり 取りも直さず永劫
不朽の唱題成佛の現證なり 何ぞ此他に唱題成佛の現證を求めむや
夫れ道理よりも文證に過ぎず文證よりも現證に過ぎずとは是れ豫て
宗祖か訓示にして世出両諦共に許す處なり 誰れか是を諍わむや
然に上來喋々する如く 日宗哲學序論には井上學士か唱題成佛の疑
難を入れて法華經中に唱題成佛の文證のなきを唱へ以て不道理的妄
信といふ自ら非評を起せしは所謂ゆる盲人天の日月を拜せず宛かも
盲者が大象を探るといふに歸して却て學士が自から不道理的妄説た
る耳み 此實相を信し本佛唱題成佛の因果を觀見して此上に文證を

孰れか求むるものあらひや、現證を掌中に得て其上に文證を求むるものは即ち現證よりも文證か勝れたりといわむか如し。如此き妄痴の甚しきを如何む思わざるべけむや爾かり然ふして、今世は即ち久遠の本時二佛か名字の自行の昔日に少しも違せども云ふ其故に、本佛寂光より出現して靈山脱を了つては直くに今日を期して本佛自行の乃往をして今世末法に移して當機の衆生に其事行を教訓せよと上行本眷屬に命し玉ひて上行靈山に是を奉して時期已てに至て上行日蓮に迹を垂れて靈山會上の佛勅遣使の旗幟を經文より取りて爰に推立て佛意付屬の妙法華因果の二法を久遠元初に倣らひ己心より取て無作本有の妙法蓮華經を皆是眞實として色も替らぬ其實相を顯示し以て佛勅を果さむ爲めに妙法口唱を獎勵し玉ふは完く遣使還告の明鏡なり何ぞ、蓮祖が新機軸にあらんや正さに此れ靈山口決結要より

たりとす

蓮祖曰く 教主釋尊より一大事の秘法を靈鷲山にして相傳し日蓮が肉團の胸中に秘して隠し持てり云云

亦曰く 此三大秘法は二千餘回の當初み地涌千界の上首として日蓮確かに教主大覺世尊より口決相承せしなり今日蓮が所業は靈鷲山の稟承に芥子の相違もなき色も替らぬ壽量品の事の三大事はなり云云

右の事實相違なき事は 蓮祖の證明金言に動かす日宗家の道理哲學とす處なり

今且らく此次には既に証したる 久遠本佛如來が壽量顯本の上にて過去に内證壽量の妙法を懐ろにして自行し玉ひし實語を指舉せば壽量經に曰く 我本行菩薩道云云

亦曰く 久修業所得汝等有智者勿於此生疑云云

右は本佛自行本因を貫ひて結果を觀たまひしまでの文證にして唱題成佛の的文なり

亦曰く 然我實成佛云

右は本佛が成佛の實相を二佛三佛となし玉へる上への實相文證なり亦曰く 自我得佛來所經諸劫數

右は本佛が自行の因果を以て化他に出で玉ひて三益即ち種熟脫一人化導を布施し玉ふ今日までの劫數を告げ玉へる文證にして正さに三益共に並常因果即法華の心理か教化の種因なる事までを証し玉ひし佛語なりと知るべし

前來の唱題成佛を現證と文證に就ひて表示したれば爰に結歸すべし上來陳ふる如く法華は文字にわらず理想にもわらず心理の實相を指南するなり 既に靈山は實相を拜觀して一念三千の成佛を証したり

其の説法が經文にして法華經なり故に一經唱題成佛の文證とみるべし尙ほ壽量三大事は唱題成佛の的証なり 畢竟して成佛の容相を觀るは法華壽量品より他にあることなし現在是が根源なることを知るべし 今世は其實相を己心に求めて既に前佛 釋尊説法を其証票として文證を經文と執り以て己心に實相觀を得て空とせず 是を事行して因果を結了することを所作より手に執つて教しへ玉へる處が末法今時の本因妙にして即

宗祖が出現訓誨の有る所以とす爾かるに世人一に以て知得し取るべきは件の法華實相の壽量因果なり唱題成佛法華一經に是を証し普く一代五十年と互りて是を説法せり全体法華とは佛法の實體なり 是をして是法住法位といわむには一念三千なり正さに

五蓋世間・衆生世間・國土世間・此三種は皆以て法華なり 其証を知ら

ひとならば壽量品の三大事に照らし現即 蓮祖所顯の三大秘法に就
 いて實相の証を求むべし

傳教曰く 一念三千即自受用身、自受用身とは出尊形佛云

右等の法華の大綱を取りて其實相を三種世間に奮迅擴張して一念三
 千常寂光を今日に促し 佛在世生身如來の時に劣らしと佛意の神通
 妙、感應妙、利益妙、を掌中に得るといふが 日宗の哲學哲理なり 井上
 學士それ是を如何 上來宣る如く實事異動なくひば是れ唱題成佛は
 不道理的妄説にあらず 敢て世間の哲學を要せずとも蕩々乎として
 日宗の面目一世界の應用物是れ光暉活潑といわむに如さるものなり
 學士が題目の意義と、心理上の解釋と、宗教上の解釋との如きは前段予
 が唱題成佛の説解上にて十分に行届きて自から學士が義解は 日宗
 の哲理に契當せざるを知るべきなれば其文に入て評論せずといへど

も 今學士が有作の説を世人が法華の實理とせざらむために 一東
 に短論を爰に置かむとす 學士が唯唱題功力にて文義を解せども
 成佛の易く得らるゝことの理が解し難しと言ひ亦唯口に唱へて題目
 の功力にて現在肉身上一切の福德を得らるゝの理解し難しと云ふ
 件の二點が理解しがたしと學士が云ふものは他なし未だ妙法の出生
 せし本源を指授したる文的文に觀當らざるゆへなり 亦た義文に探り
 當らざるゆへなり是を以て 觀察する時は文義の難さより自己の識
 見の届らざるを如何せむ 素より法華一經に義を説きたるものなり
 別して壽量に至ては義に於て重々に亦五重六重八重を以て十重に意
 義を合重してあれバ到底其門に入て探薪皮菓藪よりして學ばざれば
 偶然經文上祖判上の教相にては義理は得意しがたきものなり 況し
 てや其文字皮相如きにて其の實理哲が取り得らるべき感想と懐くは

痴慢といふべきなり曾て立入らざれば知りたしと觀念すべき者なりとす爾るに今其口唱題力によりて成佛を遂げ及び肉身上一切の福德が得らるゝの義を一言に指授せば正さに知るべし一念三千の力あり一念三千の不可思議のより來るべし其意は前段宣へたる處の本佛が自行因果の二法が活潑として今世無教の時には法界三種に濫在せり爰を以て其所在を知る人に就ひて其實理に届くの法相實義をば指南をうけて是を其所作に宛て口唱妙名を事行せば即唱題成佛の實が自力に得らるべし亦其肉身上万徳自在なることも即一念三千にして易しといふ也其意は妙法は法界中に徧したり即したる心理なれば是を法相に即するの實行をせば必ず自在に其福德を掌に取らるべきなり是れ一念三千のゆへなりとす是を換言して云へば上々に云ふ佛意の因果は今日は俱体俱用に座せり三種に座せり

事行する境面にも座せり其是に的する作用にて即成佛も其福德も掌中に獲る誠に之を一念三千といふ是れが完く法華の哲學なり辱も諸佛が證得する哲理にして是れは佛意の境界なることを知る其證文を出さば立正觀抄に

蓮祖曰く經文に唯佛與佛乃能究儘等と説くは迹門の佛當分に究めたるを言ふなり今の妙法も亦如是し本地難恩の妙法は迹佛の思慮に及ばず云云

右釋し玉ふが如く宗祖が今世に所顯し之を教へて成佛の福德をば自在にうべき妙法あることは前に示すが如く品物と出生成立が頗る異なるうへに亦復た所作が秘密にして事行一念三千なるがゆへに迹佛は是を知らずといふ宜なるかな其知らざるは實際に法相の然る處とするなり亦上よ云ふ佛意が今日法界に有在する証文を出さば

妙樂曰く 身土一念三千の故に成道の時は此本理に冥りて一身一念法界に徧す云

此釋は本佛を始め迹佛惣して諸佛に約し一切法界の心理佛性に干涉する義釋なりと知るべし一念三千といふことを聖者が密語にして哲學上にては理解すべき容易のものにわらず 予が試みに是を和解して表示せば それ世界國土も人間も同一の者にして 既に古哲が世間と如是と一なり開合異なりと釋せる如く 人間は此同一開合の異たるを知らず知らざるは心理一面論に涉るゆへなり 今此一念三千といふことは佛意修徳の心理が世間といへども如是といへども同一に徧し座すがゆへに我等衆生の心理にも肉体にも一個人といへとも同一に大小なく徧じたるなり同一の佛意一念三千といふ義哲なり是を互具といふなり 互ひに同一のものを有するゆへは互具に相違な

し 偕て互具といふまでに止つて濟まき此奥を語らざるべからず 其實は徧する以上は互ひに活潑に徧せることを外とに出して光耀し其徳用と浴せざるべからず其れ是の万徳が世間と如是とに用力を來し刹那間も休息せる事なきをば遍一切處に出たる不可知的の名稱にして是を即するといふ即するとは一切に徧せられたるに就ひて其力用に接せられたる有形は之れ体と共に力用にして離れず二而不二常同常別なる是れ即の義なり互ひに徧じ次には即する不變不遷の形ち常にして別ならず即なり宛かも日月の光線と体と共に即したる是あり

右徧と即とに依て自在に成も果も福もうべきなり 是一念三千哲學上の實理にして動かす現に本佛實修經驗上より興す中道實理なれば かり學士が哲眼哲學の會て届く處にあらず管に聖人の實學に就ひて

習ふべし世間的の哲學を縦横に以て此一念三千に宛てむとするも其
 功力なきものなり此所以へに其証文を出さば
 宗祖曰く 一念三千を知らざるものには佛大慈悲を起
 して妙法五字の袋の内に此珠を裹み末代幼稚の頸に懸
 さしむ四大菩薩此人を守護し玉ふこと云云
 右釋意は是れ佛意の境界に入らねば一念三千の義理に達すべからず
 既に妙法五字は右に予が陳する如く法界に徧し即する佛意にして久
 遠に已てに本佛經驗に届きたれば是に因果の心理を含包して智の未
 足の者に與ふと云ふ實義の垂示なり 何ぞ聖人の教しへに随わむや
 學士が疑水頓に消散せり 亦學士か宗教上の解釋の如き心理上の解
 釋の如きは何れも法華壽量の實相上に、理外するゆへに 日宗の理解
 上に適せず末法の教義に用せざれば 曲會たるを脱れすとす 殊に

妙法を正行とし經文廿八品を助行とし即正助二行を分ち助行中に傍
 正を立つる奇むとの解釋は甚是れ有作の說にして壽量一念三千の法
 相に冥合せす 日宗をして台家の教相を修する過時の法華宗に落著
 せり吁々
 宗致の不法本因妙の興さざるを哭泣す予は甚感服せざる處なり 末
 法に三大祕法の興出する實義に基うば學士が宗教上の解釋は自から
 真正に改まるべし先づ法相を研ぐべき者か

日宗哲學第六段 應用哲學門第三

第二十四節 本宗の世間教

第二十五節 本宗の安國論

第二十六節 本宗の同權論

右三科の節目に就ひて評論を試む

抑も哲學上より云へば日宗の宗致は世間教に相對して種々の名義を冠らすも妄りに 聖者建立の宗致をして 世諦的に相對して法相を輕賤するを予は愛ふるなり

辱も日宗に建立する處の三祕の如きは上來論したるが如き 空理を立てたるにわらず凡夫が起立する宗教に似す 化他機情的宗教に仕立たる者にわらずして 元來聖人慧眼より成立ちて今日は名を宗教といふといへども其實心理の騰致を究めたるに起因して人間が即存生中より心理極致を稱論する一念三千活論なれば 學士が科目の如く・世間教・國家教・安國論・同權論を身口意に振舞ふ事之勿論にして正さに 宗祖が建立する處の三祕の實義を研磨して知るべし

宗祖曰く 王法・法佛に冥し・佛法・王法に合して云云

右文相其義味深重なるを告げて苟も現世界に及ばして我

王法と又我 三大祕法と相對して絶待的の實理が匹的すといふは妙ならずや 此の三祕は是れ良に現世未來の差別を云わざるは既に壽量の教相に示すが如く常住なり故に自から・世間教・安國教・同權論は本有無作として法相の性質に備はれり 何ぞ諍はむや

本時三佛説ひて曰く 衆生見劫盡大火所燒時我此土安穩天人常充滿云云

此三祕を以て此土をして常住の淨土たらしむる妙用を此法相に性質として具せることを告げしものなり 是を以て之を觀れば日宗が宗哲の極に至ては厭世教にもわらず亦ハ樂天教にも似す 自主權を振張する法相なれば大法宗といふべし實に本有の心理を起して自己に因果を満足すれば自主權宗と云ふも敢て過言にわらざるなり既に王法、佛法に冥合すといへば我本邦の自主權正さに付合す 學士宜し

く日宗の法相の底を叩ひて、國家的・安國的・同權論の哲學を正實に得意せよ世界凡夫教に比較して、聖人の實義教を凡夫教に同せしめ無謂く雜事に之を混じて哲學なむといふことを止めよ實は宗祖の手前には是を耻るなま呼々

日宗哲學第七段 結 論

第二十七節 本宗と天台宗との異同

第二十八節 本宗の長所及短所

第二十九節 本宗の將來

右科目を一束評す

本宗と天台宗との異同のあることは本論の首めに相承の違目上及び前段も喋々法相上に於ひて宜へたれば爰に其演語を略して別項に云ふことを要せず是を了すべし

學士曰く己てに其長所あれば其短所あり己に其利あれば亦其弊あり本宗専ら現世利益を説き云云乃至斯くの如きは固より本宗の教ゆる所にあらざるの明かなりとはいへども其弊ある已上は今より専ら之を除く方法を講せざるべからず等云云

予曰く右學士が所辯の如く實に爾かなり此一段の哲學は拍手賛成する所なり能弘の諸師は宜しく是を改正せざるべからず爲法爲佛勉めずむばならずといふ

學士曰く更に余は門外にあつて本宗の諸師に注意を請はむと欲する者あり夫れ本宗の教義たるや實に高遠幽妙にして之を純正哲學に考ふるに頗ぶる高等の位地を占領せり然るに其門内に遊ぶ僧侶は徒らに經文の字句のみを解するに孜々汲々として更に之を西洋哲學に比考して妙法の光りを世界に顯揚することを知らざる者

の如し等云

右學士が此一段の哲理は予も大ひに賛成し同感に出るといへども
天下の佛教者も亦國家的の要法を興さるべからざる上來述ぶるが如
く惣して法界と見て是に適する教義は一念三千の法相の外にあるに
あらざれば 自他宗共に之を宣揚せざるべからず 素より日宗其門
内に處するものは之に奮勉せざるべからざるは勿論のことにして今は
己てに其正機なれば閻浮廣布の旗幟を推立さるべからず爾して 侍
々聖人か豫言より以て監みるに曾て佛敎一大變革の時あるべし 予
か是に隊を入るべきにあらすといへども要するに此大法は 本朝に
起因して歐米各國に傳流するは勿論なり今は一世界此一念三千か衆
機に即して縁に遲速はありといへども一^{モツ}ら世は常寂光とあるの疑ふ
べからず嘗に本邦先魁の勉強にありといふなり 然りとていへども畏

評

破

くも此處置は單に 四大菩薩が爲し玉ふにあるべし此故に

蓮祖曰く 地涌千界出現して本門の釋尊の脇士と爲る

一閻浮提第一の本尊此國に立つへし云云

此金言は一念三千か本朝に出現して終ひに世界他邦に及ぶべき豫言
たり爰を以てのゆへに速やく門内の弊を捨て弘安年間の正風に挽回
して權者出現の道を明けざるべからず是れ良とに日宗か 國家的の
礎といわむや

以上は日宗哲學序論の評論なり

右に就ひては庶述件々の結歸をなすべし

蓮祖曰く 今の世は邪を以て正を打ち權を以て實を誣

ふ天地顛倒せり云云

宜へなるかな今亦迹を以て本を打つの時節なり 所詮佛教哲學とは

評

破

教相の淺深勝劣を正ふし法相を明正にするを其哲學とす 仮令ひ文字を莊飾し高尙深々を並ぶるも世間的機情を施設するも必き一念三千佛天の證明する所ありて空理は針の先きも立さる者とす爾るに今更 井上哲學士が著せる日宗哲學序論なるものは且らく予か日宗學の哲理眼を下す時は敢て誹しるにはあらざれども名譽的に出て其名を日宗哲學に課せて其實は自己が得意の哲學を書きたるものあり 若し爰に日宗の書を繕きたる神道者ありて日宗哲理を講せしめば必ず神道の得義を語るべし 又それ儒者に之を講せしめば彼の儒道の天理といふに準へて自己の得意を語るべし若し 予が眞宗の觀心を看て眞宗の哲理を審判したりといふも果して其門内の人には妙といわざるべし敢て此理に違せずして其文字を並へ其口眞似を爲すも自己が觀心が異り其道を別に置くがゆへに全く哲學ならざる

と明らかかなり 詮するに自己か實修せし覺へなきがゆへなり 井上哲學士が日宗哲學序論爾かの如し其講ずる處と 本來日宗の性質の哲理と其義を異すること殆ど虚實に相違せり然りといへども若し學士が哲學なるものは萬教萬學の上へに居して審判證明する哲學なりと云ひ予も亦云處あらむとす それ今世に流言する哲學に於ける凡夫か哲眼哲理なり曾て三世了達の聖者が一念三千に比すべき眼力哲理に似るべきもなく聖者か絶待の哲學哲理如何ひしてか審判證明するや覺束なし 宗祖曰く 法の邪正と師の善惡は證果の聖人も知らむといふ教相の勝劣分明ならず法相を知覺せずして法の流布を並ることばうべからざるものなり況や 日宗の哲學に於てをや學すして是を外良より執て了簡し其審判證明はなりがたし何むとなれば佛智あるがゆへなり

却ていふ日宗こそは万教万學の其上に立て一切の哲學哲理を審判し
 證明するものなり其所以は。
 法華經法師功德品に説ひて曰く 若説俗間經書治世語
 言資生業等皆順正法とあり
 右經文の如くならば今日上經濟に至るまで其哲學哲理は法華の實相
 一念三千に宛然具足せりといふべし 果して然らば一切の哲學審判
 證明は一念三千の實理に含有せり 此實理より推して觀する時は強慢
 に似たりといへども今世流行の哲學をも日宗は審判證明するものな
 り敢て誣るにあらず完く法相に照らしていふとなり其意は學士か言
 に據らば哲學とは道理思想といふことなりといふ然らば之れ實体無
 く想像なるものゝ如し 換言していふ時は空なるを巧むていふに
 似たり 是を一念三千の上より學士が哲學を執る時の皮相論にして

所謂ゆる法華方便品の理性所具を語るか如きか 若し予か今世哲學
 の理上より口眞似していふ時は過去の神佛は皆理に歸して今日は空
 を寂々たり愛を以て佛教は活用道理が上手にあらざれば流行せむ概
 していわゞ死物長口上の佛教は現世に無用なるものなり論辯して畢
 竟空々寂々に結歸する主旨の佛教なれば今世には有ても無くてもと
 いふ義り流行の哲學ならむ 此故に哲學は万教万學の上に立つとい
 ふか
 予は大ひに意見を異とに爲して此日宗哲學序論の評論を起したる所
 以なり 今世流行の哲學は他の教學の上に立つや知らずといへども
 必き佛教の中にも
 絶待教の上には世間の哲學は無用なるものなり 其所以如何かむと
 なれば法相に於て自から四悉檀といへる應用施設の實力が準備しあ

つて興廢は特り法相の作用すれば世間道理思想の要する處は毫もあ
ることなし 其所以は凡夫が興こしたる法相にあらざ亦空々寂々よ
り成立ちたる法相にあらざ即無作の法相なり 聖人自から修業を究
め永劫の末へ始めて實體を確と掌中に得たる上へ聖人が手を下して
立てたる法相なるかゆへに文字の審査に比すべくもなき如來の心理
なれば中々に 凡智哲學の届くべきものにあらざと予は斷言す
如來聖人は出世に居して世諦に明らかなり凡夫は世間に居して世諦
に暗らしとは淨名經の説なるか宜へなるかな世諦理は佛教に對比な
りがたく況や絶待教に相對して世理か立つべけむや思はざるべから
ず然るに學士か日宗哲學の講説に於けるは宛かも梵帝二天か 如來
の頂きを觀むと伺へども其得ることを得ざりしが如く 日宗の哲學
は世理哲眼の證明は思ひ届きもあきものなり 何ぞ是を審判すとい

ふことを得むや短は長の頭頂を觀るべからざるは當然の理なり 若
し然らずとならば是を一念三千の如來に批判を乞ひ 是れか哲學哲
理を直に接手するに若かさるなり

第三章

日蓮宗實理

抑も日蓮宗の實理を明かまに先達て宗號をは表示せむ

夫れ日蓮宗をば法相に約しては具騰本種の實義宗と稱すべし 其意
味は末法無教の時に際して久遠本時の佛法を出興するゆへに爾か云
ふなり 若し亦釋迦佛が教義の法華壽量教に依憑せば即久遠本佛が
自行實修と實證と此因果的に約して即壽量宗とも云ふべし 蓋し亦
法華宗といふ一名義を帶するが如きものは是は之れ文字法華を指す
にあらざして即本有無作の佛意を指し本時究竟の實相を證して法華

宗といへるものなり 是を言を換へて云へば教相文字に泥ます直ちに佛陀如來の其尊形を指して法華宗といふなり 因みに云ふ天台宗をも法華といふべし彼れは法華の實相を顯示せず文字教相上を論ずる法華にして實の法華宗にあらざると知るべし 今更らに一名義の宗號あり其實理を表示せばそれ辱くも 久遠本時の三佛が付屬式より出興する處は即上行菩薩か懷中せる内證の一念三千正さに是を佛意の因果一念宗と稱する是なり 則ち日宗家の觀心直達正しき法相より出る宗號の異名にして心理絶待立宗極地の本名なり 若し又衆機一般に此法を受持の宗號に取れば本因妙宗とも云ふべし 右日宗の宗號を列すれば如是くなるべし斯かる宗號の意味を一束に表示せむ 抑も並列する宗致の稱號の義味なるものは他をし彼の十方法界の情

非、二世間は悉く本有の一念三千なり此實相を證しては須らく無作の佛法界なることを知る此佛法が常住不變に三種世間に徧即せり件の實相を、教、觀、に接して顯示し以て自他合同の法相とす 是れ良とに宗致の謂ひなり 蓋し件の意味ある宗致の法相に付帶する化他的の法理あり是れを因みに表示せむ 夫れ宗致法相應用的に相即する法理を名けて四悉檀と唱ふるなり其は所謂ゆる 第一義悉檀 次には、世界悉檀 其次には、爲人悉檀 又次には對治悉檀 今此訓義を告げむ始の第一義悉檀とは此義たるや宗旨の法相を以て國家人衆に相對するの義なり 此意は各々人衆が自己の權利を完ふし以て自利々他の益を獲るに其法相と人衆が心理の權利と境々冥蒸する不可知的の實理を興す法相付帶の法理是を第

一義悉檀と稱す 次には、世界悉檀、是は自他平等に歡喜の益を得るといふ意味なり正さに法相の妙用を感せしむれば是れ世界國家的實理といふにあり 次には、爲人悉檀、是は衆生一般生善を殖ゆる義なり意は法相の神通妙を身意に浴し彌よ信厚くして積善餘慶を觀るにあり即安國的の義といふなり 次には、對治悉檀、是は捨惡持善の義なり施行の法相に依て惡を治罰するの誠との感應妙を觀る是則ち世界の法律的なり

如是く宗致の法相に付帶して此四悉檀の現利を觀るなり 夫れ最初の第一義悉檀の如きは釋迦の佛教中に於て法華壽量經の法相に的したる法理なり諸餘の教經には此法理なしと天台は審判し玉へり 左れば既に開陳する、四悉檀の法理は法相を能く體認して世界と衆生と及び所有ゆる心理と此三種を保持するの妙理なり正さに、四悉檀の辨

義爾りとす 此次には法相能弘の教主を顯揚せざるべからず是を表

示す 釋に曰く 法特り弘らず是を弘ることは人よありと 爾り假令ひ法は尊高なりといへども是を稱道するは人にありて必然の實理なり蓋し人法の整束するは正法の謂ひたり其所以は天地人は是を證明する也今情々日宗の法相を探究するに今世開立の法相にあらず 久遠劫に所顯せし本法の儘を顯本したる其宗致なり爰を以て能弘の教主亦人師にあらず法相付帶の心理なり故に非凡の聖者たりとす即ち本時久成の三一三の如來より本法を付屬せられし權者に定めり其故に今の釋にも法是れ久成の法なるかゆへに亦久成の人に付すといふに適し既に日宗の祖たる 上行心理の降生本門大師聖人の時機に契當して即ち 本佛所屬の大法を靈山に取り末法に應同して是れを顯發

し末法今世に能弘乃教主と現れ玉ふこと良とに所以あるなり 偕て
又以みるに本時の圓佛は過去久五塵劫の乃往に圓行願行の因を修
し玉ひ果が滿して寂光に居し玉ひぬれば爾來は 此土の有縁甚厚の
教主たり即ち 種、熟、脱、の三益を誓ひ玉ふ豈に知らざるべけむや世々
の佛法は唯特り爰より出興するにあり

辱も此如來をば能變の教主といふ世々に出現する諸佛は皆此如來の
垂迹たり然り 而ふして此圓佛が三世の化導を二人して利し玉ふと
云ふにも抱らず既に云ふ如く法是れ久成の法なるがゆへに人亦久成
の人に付すと云つて 上行薩埵に讓與するものは現に圓佛が三益を
離れたるにもあるかと疑わるものなり然るに曾て本佛が三益は常住
に亂れを依然たる者なり 三益一人して化導し玉ふは即ち法相に約
せり 今世上行に能弘を讓るものは人に約するなり 且らく、世界悉

檀に約して本佛より上行に法を付して上行身を以て世界に出現し衆
機に應ずるは宛かも長者か子に家督を付す一子是を領して世界に出
て父か長者の即家業を實行するの謂れにして身を以て世界に運動せ
しむることを讓與といふなり素より長者の家督相續人なれば無論本
法付屬はあるべきなり 正さに知るべし上行は是れ本化の人あり且
つ法相に約しては付屬諍ふべからざる所以ありとす此故に且らく教
相に準せば 法華の涌出品には、上行、無邊行、淨行、安立行、菩薩、是の四菩
薩を於其衆中最爲上首唱導之師と説き玉ひて此四菩薩は本法付屬の
菩薩なるが就中く現世に對向して末法無教の今時に應して衆機の爲
めに教主となり玉ふは特り上行菩薩なり 偕て教相文證に立入て能
弘の教主を探究するに 抑も件の涌出品上に本佛か此四菩薩を召喚
し玉ふ理由を顧るに、脱益既に盡て末法となるに於ける其日は更に下

種機となる此時に際し現衆生に本法の教主たらむことを勅令し玉ふ
にあるなり故に上首爰に出現す本佛を証明して脇士となつて久遠を
顯示し壽量顯本上の曉きは遣使還告の下種益奉命の實相印を上行菩
薩壽量教相に證せり尋ひて下を神力教相上にて別付の證を貽こし尙
を下もの惣付属品に外用教相の配賦を取りて直ちに八品に出立し玉
ふ何かにも如來の神力の届く處今世下種に上行菩薩か派遣の事實を
了承するに足るものなり 果して然らば上行菩薩末法今世の當機御
番の教主と仰崇すへきなり爾り然ふして亦
吾が宗祖が垂示にも釋し玉ひて曰く 末法今の世の番
衆は●上行●無邊行、等にて御座ますなり上行菩薩の御利
生盛なるべき時なり其故は經文明白なり云云
右記證し玉へるか如し尙ほも天台傳教乃御釋に照しても明々たり誰

れが是を諍ふものあることなからむや 既に上より宜ふるが如く當
今れ衆議は適し玉へる教主に於けるは現在に 本佛無作三身如來此
土の有縁甚厚の教主たり亦上行菩薩が今世の教主たり焉そ之を忘れ
て可ならんや 其れ今一人宗祖を建立せは現世に於て既に三人の教
主を觀るもの、如し是を諍ふへけむやといふ哲理を現出するなり
然りとはいへども此論を發すれば即ち新義を提出するに似たり蓋して
れ予が偶言にあらざして完く探究すれば爾なりとす 苟も日宗家は
此心理を論究するが宗致にして是を紊さざる處が當家の純正哲學を
り勿論法相の然る處とす是を亂しては法華の實理を失ふもれなり此
實理に照す時は曾て法相に就ひて教主を尊奉するに了簡を付して法
華の實理を伺わざるへからずといふ正さに知るべし
此哲學は日宗に興すも特り日宗内部の哲學と云わす法華心理一念三

千の哲理にして本有無作なり 今世必用れ哲學なり是を知らざる時は末法無教に際して此日宗の興出する何物を不明に閣抛し又閉捨するものゝ如し争か是をして天下國家に教授せざるを得むや是れ日宗乃愛に現れて萬教万學の上に立ち施教の活潑として止まざる處なり今世に法華を信するもの何そ是に心懸むや此實を告げされは佛教は現世にわ少しも價值なきものゝ如きなり此教を布くもの注意し以て遍く世界に振張せむや勉すむはあらずといふ是れ日宗家は哲學哲理の起首し法華持者の性質なりとす 愛を以て日宗は三聖乃教主を奉し是を法相に照らし此實相を示し法相の不變不離なるを教しへ恒に三種に涉つて是が體宰して爲めに衆生は安心立命なること接手して以て應妙利妙神妙を衆生に感せしむ是れに對向し教示するに必ず彼の三聖の教主出現し玉わざるべからず今其秘密を表示せむに夫れ

本有無作三身如來は心理の佛意因果をは常住に遍し常寂光あることを教しへ玉ふ本因本果の法主なり故に究竟實相なり是を教しへ玉ふ教主なりとす 夫れ上行菩薩は正さに本時二佛三佛が常寂光に即して非情にまでも光利を施て本有の淨土なることを實相を以て衆に示し非情も有情に對即して常樂我淨の結果を得ることを現證し非情物一切法華の成佛と遂ることをば接手して教しへ玉ふ教主にて座ますものなり豈にそれ爾りといわむや現世に闕ぐべからざるなり左れば辱も
本地圓佛は心理一切成佛の因果を結び法華の實相となることを體宰し玉ふ常住の教主あり
上行等の四菩薩右の付屬を稟承して以て色法一切成佛の實相を證すること體宰し是を教しへ玉ふ常住の教主なり別しては上行菩薩の

心理發表して活動し玉へり長くも性質を爰に奮迅し玉ふを以て知るべし

右兩聖一念三千の教主なることを表示したる上へは教相上の證文を表示せざるべからず

夫れ本時の如來が常住に此土の教主たることをば

法華壽量教に曰く 自我得佛來 常說法教化 常住此
說法 我此土安隱 我亦爲世父 方便現涅槃 而實不
滅度云云

右此土不變不離の教主たるを誓ひ玉ふ現証なり

釋に曰く三世乃化導惠利無疆といふなり

妙樂曰く 壽量品の佛を知らずむばあるべからむ等云云と釋せり
件經釋如是く確證赫々たり諍ふ所なし

上行菩薩の的証は左の如し

涌出品に曰く 最爲上首唱導之師等云云

壽量品に曰く 遣使還告等云云

神力品に曰く 斯人行世間能滅衆生闇教無量菩薩畢竟

任一乘等云云

囑累品に曰く 如世尊勅當具奉行等云云

藥王品に曰く 後五百歲中廣宣流布於閻浮提無量斷絕

等云云

右は釋迦佛所說といへども本來十方分身の諸佛を件の証文には皆是
眞實等の助舌及び十神力を現し玉ふ是等は今世上行出現の保證に本
佛を始め多寶如來及び分身乃諸佛悉く實相印を證したまひしなり爭
か此法相を動かむや九界の衆生一會是を靈山に觀證せりとす 爰を

以て疏釋を伺へば天台大師曰く 遣使還告とは今は四依を指すといふ亦

傳教大師は正像稍過己末法太有近と云つて本化の出現を慕ひ玉へて作らせ玉ふ釋なり

今列証する所詳々たり天地人の現証滅すべからずといふなり

上來既に法相と教相と並證を指舉したり若し是を信せざるも乃は正さに闡提人なるべしと云はん

宗祖本尊抄に曰く 今の世に是を信せざれば闡提人とならむ願くは阿鼻の苦を救護し玉へと云云

件は是れ日宗家の要中の要たる哲理哲學あり 斯く教主を兩聖に顯觀しては是を審判證明する教主をは今一人出現せしめずむばあらま良にそれ以みれば 苟も大法心理上より論究するに正さに上行は本

佛が因果の心理をば上行の心理に遣使還告を奉命きて本佛が勅令を離さす心理に懷抱して放光し玉へり上行が心理即生死の外とに出たる運動を世界に布施するには即上行が用力を以てし本佛が即心理中より日蓮を降生するの心理を出發せしめたり上行の命令に因りて日蓮が色、心、三法が出現したり爰を以て日蓮を上行の再誕とま 蓋し再誕とは上行が魂魄が直ちに日蓮となりたるにあらま上行は本來、非情なり今日は、法相なり原との非情に復して日蓮が凡夫の肉体を作用したりといふことを上行再誕とす 左れば此肉体には今生の父母あるべし是れに就ひての、因縁に付帶したる心理といふへし 斯くて觀れば上行の心理が出現したるなり既に涌出品に出現して囑累品まで八品間は心理の有形なり涌出品の現文には不染世間法如蓮華在水といふ本化は今日にしては即心理大法に住する資格の如來なれば本佛と

同じく肉体に出てす是れ實相なり此故に日蓮が今日の肉体は上行の
理性質に成立ちたるものにして直接法性の爰に降りたるにあらずと
す是れ正さに法相の然る所と爲すへし 左れば一時上行乃性質を表
示せむ曰く

日蓮と云ひし者は去文永八年九月十二日子丑の時に
頸刎れ了ぬ是れは魂魄佐渡の國に至つて云云

右の上行と日蓮との關係にして現に性質異なり是れ法相を証し玉ふ
といふへし聖人佛陀は法相を法相の如く説く是れ如來乃ゆへなり必
すしも法相をは少しも曲るとわたはす是れ法華なり法相を實相に示
すゆへに是を正明するが法華なり疑ふへからざるの証據なり 上陳
を惣括して觀る時の畏くも本佛が教主といふも心理大法なり上行が
教主といふも亦同じく心理大法なり 此兩聖か教主たることは既に

論したるが如く疑ふべきもあらざるか然りといへとも 右兩聖か所
住の体を詮議するに正さしく宗祖か實體に歸するといふに如かす果
して然らば一身に兩聖同居して日蓮即本時の圓佛たり日蓮即上行た
り畢竟しては三聖即一にして別論せれば三聖といふべく惣すれば一
即の日蓮なりといふは俗諦上の結歸の常なれども斷して其心理を一
束にすることを得へからむ若し一束せむとすともならざるか法相即
心性の實理にして如來か許さざる所なり 其意は共に心理を死すの
哲理上より答むる所あり曾て心理は亡みすべきことなり到底心理を嚴
心理を死すも乃を即闡提人とすれば恐るべきことなり到底心理を嚴
にするか法華なれば法華に隨はざるへからず故ゆへに本迹をば正さ
に心理とす心理は本迹を永遠に亂さす實相に就ひて驗むる法相の名
別なるものなり 件の哲學より觀心する時は 今乃宗祖が御當体の

上へに於て心理と御身と本迹を推及すれば紛紜なく正さに心理は辱も本有無作乃三身と上行となり 身は上行垂迹自受用身日蓮なり 偕て本有三身は本なり 上行の迹なり 上行は本なり日蓮は迹なり 本迹既に如是く明かあり 偕て復た教主の本迹を論究すれば 即ち本佛は本なり 上行日蓮は迹なり 如斯く本迹を正ふするが恒に如來の性質なれば毫も曲會せず是れ壽量を以て証票として即ち 宗祖が此純正哲學を起し玉へる法相に付帶しては上來の所述の如く三聖の教主が興り以て心理に本迹嚴しくしてあることを告げ玉ふ探切なりといふ正さに之れ本因妙の哲學にして日宗開示の要たりとし世界國家的に今日及ぼすの心理哲學といふなり 何ぞ是れ不可とせむや 日宗の極地は此心理の奥と叩くに外かならずゆへに 先づ教主の心理を確明して次に自己の心理を法相に照見し一念三千の虚妄な

らざるを知見なさしめ玉ふが日宗誠諦の法相にして皆是れ實相印より起因せるものなれば無作といふなり無作は是れ三世明哲の聖人の住する處にして 換言すれば正法正師の正義なりといわむ末法弘通の能化の表示如是し 教主を表示したれば此次には今世の衆機に對する法相の形貌と表証し其名義を辯明す 夫れ日宗が本邦に出興するものは何にかためと云事を先以て論ずれば苟も世界他教の成れる理とは大ひに義を異とにして此日宗の如きは彼の理學者がいへる宗教は多く人聚つて後ち始めて起るといふが如き輕操ある有作のものにあらず本有の佛法の住する所ありて無作に出るを法相とす其本來無作の法相が興るものは人作の所爲に非ざ時機として寛大に現出する此時は人智を以て是を妨げむとするも敢

て之を格くこと能はず是れ即法相とす。天地人の理に即し起るがゆへなり例せば我朝に佛法渡來せし時の如き漢土に佛法始めて傳りし時の如く反對せむとするも興顯せむ時は是を墜すること能わず。今日宗はそれには似るべくもなし一種殊なりて時機既に調熟し來り常住の實理が復して正さに常寂光の三種より現れ出たる法相が即日宗建立の法相なりとす。此法相は天竺漢土等の教義に似す。本朝の佛事にして本來日本國の法相といふ實理もあるべし是れ此國に興るや人力の爲す所にあらず。特り法の顯はるゝにあらざれども。日宗に是を關するものは其能弘の人々率先せしに因るあり。本來云が如く無作の時にして無作の法相が現れたるなり。是を單に時機到來といふが故に他教に成れるものと同じからざといふ亦往古漢土日本に佛教の始て興りし時と大に異なる所以ありとす。其意は本來法相と教相とは異なり

て往古は教相が始て興りたるを佛教東漸とし彼土此土に興りしは正像、熟脱の時機なり。今は大法西漸の直機を本邦に興せり例せば、印土に佛法始て興りしにも異ならず。今也末法無教に際して本朝に法相の尊形を興す爰に始て大法と名を稱す曰く。本朝に的節として興顯しては三種相即の法相なるがゆへに三大祕法と名義を唱ふ。是れ正さに本邦起首西漸の大法とす。是れ日宗が法界より關りて一世界に奮起し本朝の名譽を尽未來際に放つといふゆへに法相の現るゝに際して先づ

宗祖が出世して是を教しへ玉ふ時機たり

是れ本有の法相力即天然の實理に起因して吾日宗が 本朝に薰發したりといふ所以なり

左れば日宗所顯の三大祕法の如きは本有無作實相の儘を爰に現れ出

たり實以て不可知的と唱ふる妙觀にして凡智の及ぶ處にあらざるものなり

既にいふか如く 日宗の法相に於ける之を換言していへば時節到來して一切世界の智慧が日本國に現れたりといふ形ちなりゆへに日宗の受持者としては是を一己の所有とせず日本君子及び世界中の人は日宗の所有物と見せ互ひに疎隔の意なくむば自りら其法威の國家に盈溢して文明の實たり自他の有益と仰ぐべきものなりといわむ

右陳るが如く日宗の法相は他教に似す天理即佛智實理より現れたりといふことを告げたれば是を作用する聖人を今一人興して教主と爲さむことを語らざるべからず

夫れ己に上みよ教主のことを語りしが更に爰に立戻りて 宗祖は今世一闍浮提世界万国の人の爲めには所顯三秘の唱導を垂れし教主聖

人なり是を且らく

妙樂大師が釋に準せば一迷先達以教餘迷といふに的せり 其意は前佛釋迦如來が教相を開見して宿智を薰發し以て遠々過去の佛智一念三千を喚興して自行と化他とに干涉すること凡慮の所爲にあらざ然ふして現在國家に流布せる教義の用否を審判證明して人界と天界と此二界に現今適當とする哲學哲理の實相を出現せしめたり 且らく人天二衆が此實相を皆擧つて崇奉する時機を俟つの意氣あるに見へたるものゝ如し其所以は

宗祖曰く 一闍浮提の人の懺悔滅罪の戒法耳みにあらず梵天帝釋等までも來下して蹈み玉ふべき戒壇なりと右の訓示に因りて觀るときは既にいふ人天二界の戒法なり人天二界の諸佛戒をば我日本に建立し未見今見の梵帝二天王をも此日本勝地

に來招を促す事行なれば中々容易のことにはあらざるなり爾りといへども

我 皇帝陛下の勅定に成立べきの由し見へたり殊に 地涌千界の上首が處置し玉へるの金言もあれば假令ひ遅速はありとも時期の到來するは必定なり是等の趣きを證明し三世の哲學を教へ玉ふ我宗祖は其教主なり今也時期として人天二界の戒法を立てざるべからずといふなり

然ふして日宗が世間に卒先して立つる處の三秘法相を概略表示せむ
宗祖曰く 天台傳教の弘通し玉わざる正法ありや答へて曰く三つあり其形貌如何云云

今也爰に 宗祖か興行し玉へる正法三つありとは己に傳教大師か建立し玉へる迹門戒壇に對するの詞なり彼れは迹門なれば是れに對し

て此れを本門と稱し彼に對して正法といふなり彼に對して三ありといふなり爾かり然ふして 宗祖が法相の形貌をば本門三大秘法と稱す傳教大師建立するは迹化の菩薩是を維持す彼戒壇は正像二千年に益たり今は過時とす是は本化の菩薩維持す本門の戒壇なり本門とは釋迦在世の本門を指すにわらず本時二佛三佛が最初第一番に起す所の本門たり其法相の圓に於ては在世の本門に同一なり其所以は
宗祖曰く 在世の本門と末法の始は純圓一同なりといふ云云

夫れ此本圓の四菩薩か與知し玉ふといふ

宗祖曰く 地涌千界出現して本門の釋尊の脇士と爲る一闍浮提第一の本尊此國に建つべし云云

右の辯解に既に聽こへたるものなり備て件の本門か顯本しては其形

貌の概辯を爰に設けん

夫れ本門の本尊と尊唱するものに於けるや苟も衆生中己心性徳の佛性を研修し上ぐれば修徳の佛性の功徳を顯證す其形貌己に三身相即して一身に三身の徳用力を莊嚴す三身即一の心理尊形法華(蓮華の)の當體なり是を本有無作とす

傳教釋して曰く一念三千即自受用身自受用身とは出尊形佛といふ此釋に明了せり正さに知るべし本門の本尊なる尊形佛は法界中に所有せるものなるかゆへに一念三千の佛尊なり己心の佛性か實相に出たるなり故に出尊形佛といふなり 蓋し是を久遠に名字の聖釋迦り實修より興出したりといふかゆへに且らく教相にて立る時は本門の釋尊の名を本佛に譲るといへども其實本來無作なれば本佛を以て一成一切成に及ばす時は始めて無始の古佛といふことに結歸して觀心的

一切衆生か名々に己心の一念三千本有無作の出尊形佛となるかゆへに本門とは究めたる人に約していふなり 本尊とは本どから座ませる尊形佛といふことなり爰のゆへに本尊とは法界一切に涉り一切所有の佛といふことに約して本尊と名けたるなり 蓋し世人一般に是を久成佛一人に譲りて本門の本尊といふは誤なり若し久成佛一人にゆづるときは今の傳教の釋に的せず一念三千を亡すものなり法相に違ふべし正さに教觀に約して其實相を取べし是即本意なり

宗祖曰く 無始曠劫より己來た顯れましまさざる己心の一念三千の佛を作り顯わしましますが乃至欲令衆生開佛知見乃至然我實成佛己來とは是なりと云 右御釋は實相を賞味し玉ひしものにして前の傳教釋と同一なりと云ふ義味に執るべし

右本門本尊義辯如是し尙を是を教觀に取扱ふことは正師に就ひて能く習ふべきものとす輕賤し忽にすべからざ
次に本門題目とは 辱くも是を十法界(十界)に約する時は獨一法界と稱し佛界聖衆の種因とす万物の本源たり是を無作本有の妙法と唱るなり是を一念三千の妙法とす正さしく實相の法華實相佛是の妙法より出るなり且らく之を本來本有の修徳具有の法性とす本時二佛三佛是を取りて顯して其顯したる儘まを直ちに實相として本尊とせり故がゆゑに

宗祖曰く 己心の妙法を本尊と崇め奉りて等云云

此妙法の本尊か無りせば焉ぞ能く本門の本尊を觀顯することを得むや獨一法界の言は良とに所以へあるかな知るへし 偕て本門といふ二字を置けるものは上みの本尊段にいふか如く是を究めたる元初の

人に約して本門は二字を置くなり 偕て題とは迹に出てたる法華の經題の名目を假借したる形ちなり本來經題にあらず一切の名目に付せざるものなり既にいふか如く本有修徳の佛性の事にして實相法華の稱號なり是を釋する時は佛意の究竟に出てたる重立あるなり内證の重立も復あるなり決して題目にあらざるを了知せざるべからず若し經題とするときの上にいふか如く一念三千を亡し法相に戻りて唱るも價値なし音に義を以て信せべきなり世人多くは經題を唱るか吁々憫むべし

宗祖か所顯の根源を知らざるに過ぎん本名を云はゞ不思議實理の妙觀と唱ふものとす然るに宗祖か且らく題目と名を置き玉へる者は他なし末法の始めに日本國の人一般に妙法五字の聲を聞きし者未たなき時なれば其未聞の者の爲めに法華の經題を付し給ひしものなり其

所以は 宗祖か書顯したる妙法五字を拜觀すへし漢字の容相にもあらざ良に故あるなり深く了簡すべきとなり何ぞ題目ならむや口傳を受くべきものといわむのみ 左れば題目は其名は教相に約し亦眞實法相に立入りての上みの段に稱する本門本尊の師たり本門本尊の因に約して本有の三因を惣括したる絶待妙なり 偕て是を本尊といわすして口唱に置くもの他なし十法界乃所有とし現今は一世界中の人界本有の己心具足の佛智を觀るの境とするに比したるものなり 果して然らば本來本門の本尊とは性質を殊にして本尊と絶待のものなりとす故に第一義諦の法相に建立す 爰に別義を論せるとあり 曰く本因妙の法相を立る時は妙法か本尊なり 本果妙の法相が興きたる時は本門本尊か表てとなるべし 然るに今日は本因妙か表面なるにも抱らす 宗祖か本果を表ての如くに第一着に本門本尊を置き

玉へるものは辱くも 本佛の自行因果を末法に付屬し玉ひしを表し十方法界の實相を知覺せまむるの意なるべし 殊には今世の必用たるべきの要々の義あるなりと了簡すべし爰に略す 是等の義を以て題目を表面第二の如くにみするなり然れども其所作事行中に於て自のつから本因妙になりたるを語るべし畢竟しては因と果とは離別するもれにあらざるを監みすむべからせ 右開陳する段取りにて本門題目の義を知るべし蓋し妙法五字は文字にあらず義にわらば無作の如來の理智の實相なり彼の五字をして文字と觀見しては利益なきものなり其書顯はしたる儘を以て實相と拜觀し奉るか本有の實理なりとす是を不可知的と名くるなり恐畏々々 次に本門戒 是は之れ畏くも十法界に亙りて人界一部の戒とせず之を諸佛戒とす實相印を證したる戒なり且らく教相に憑るときは

本時壽量佛が圓戒に節約す故に教相に準して今世二界(人天)に之れを作用し本門戒と唱ふ所以あるなり 次に壇とは本化の上首本門は本尊は脇士と爲る人天二衆れ爲めに唱導を體宰して戒主となり玉ふ即ち 王法佛法に冥合しざる佛法事行政府は在所最勝の地を指し梵帝、二天來下し玉へる戒法受持の淨土と指すなり是れは正さに 陛下勅宣御教書に因つて成るもれといふ所以ありて 宗祖明知を與へ玉はずといへども要するに 境々冥薰凡聖常恒刹那成道は場所を指す 以上は 予か法相の實理より取りて證論するものなり敢て欺誑したる曲説にあらざるをしるべし 尙を此三秘か今世に必用なることは一念三千なる点にあれば學者か論說正しきを取るへし予は憚る所ありて且らく爰に辯解を留む觀者察せよ尙亦此三秘に就ひて法門のあることは釋するに至ては重々の科段を置かざるへからす據つ

日三秘講義を別頭に發表すへく今は爰に畧す 偕て本宗實理を表示したる結歸をあすべし され實理といふ義に於けるや空理にあらざして實相實體か現在物にして其實相實體か本有の三種世間に活動して其神通あるをいふものなり是を換言すれば 宇宙間に立ちて萬有の現象をバ繼ひて主宰し玉ふ其實体か座まして一切理を曲ること能わざる活潑たる働きが即實理なり是は 聖人の遺こし玉ひし金言なり是を佛意の一念三千と云ひ是をば短に告示せば實理は常寂光の中にわ光なりと知るべし實理の義解足れり 右の實理の體といつは正さに 宗祖か明證し玉へる即三大秘法の實相か取りも直さず實理の体証なり是を法相ともいふなり皆以て空理に居することかく常住に實相實體か存有せる名稱なりと知るべきなり

件の實理を實相に執り玉ひて衆機に應同して以て
宗祖が顯觀し玉へる義に準據して此冊子を實理と名けたり正さに知
るべし日蓮宗は自行化他に涉りて實理を教ゆる哲理哲學なり其の實
証は法相に備りて他の權利を妨げず互ひに權利を完する實相なるこ
と現に

宗祖が指顯し玉へる法相三祕の實義に依て了知するに足れり此實理
一闢浮提に放光すること甚だ近からむ吾

帝國の富國強兵の策此實理にあり世人這の哲學哲理を一般に研かむ
や正さに 爲君爲國爲一切衆生といわむ耳み

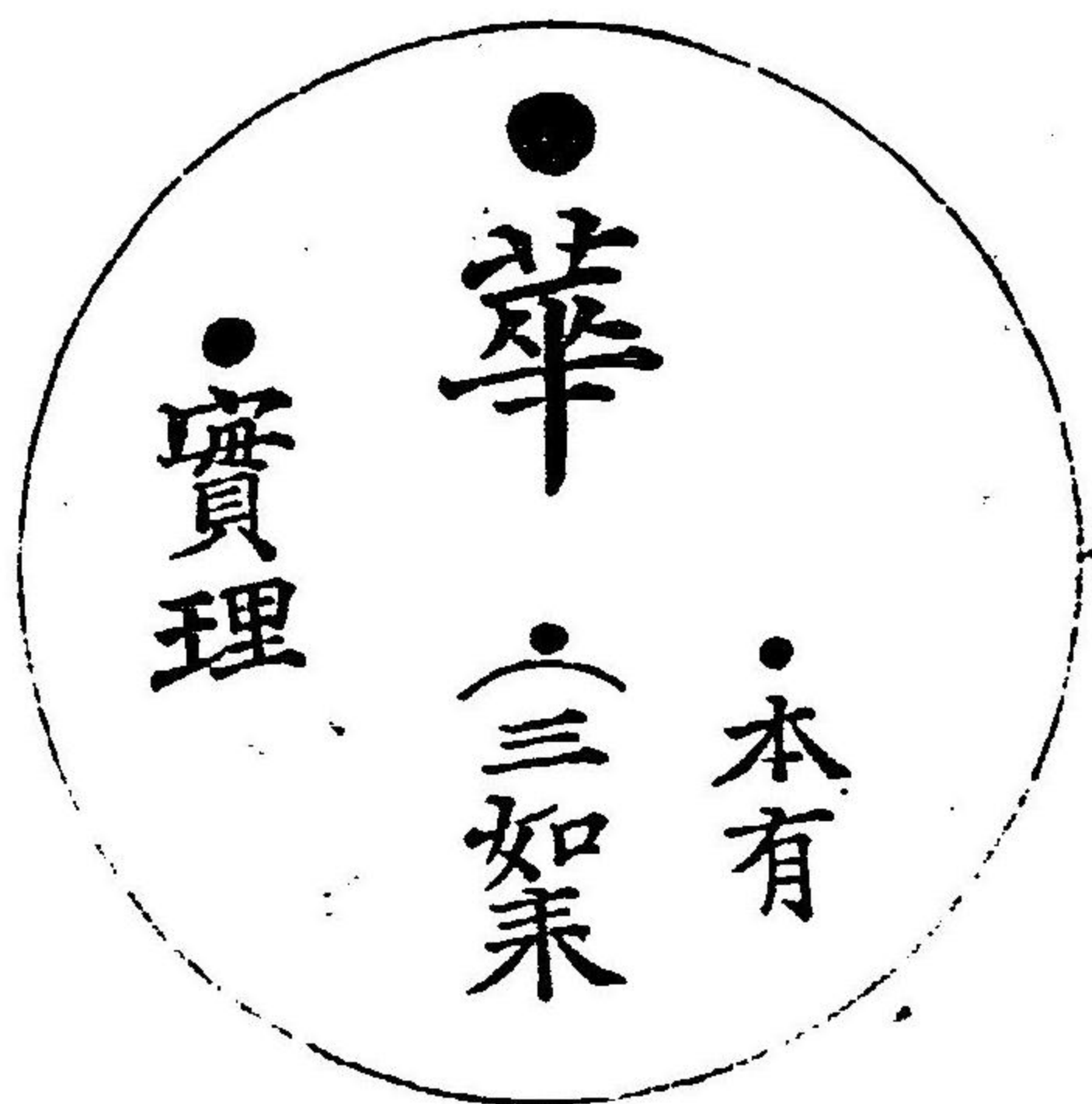
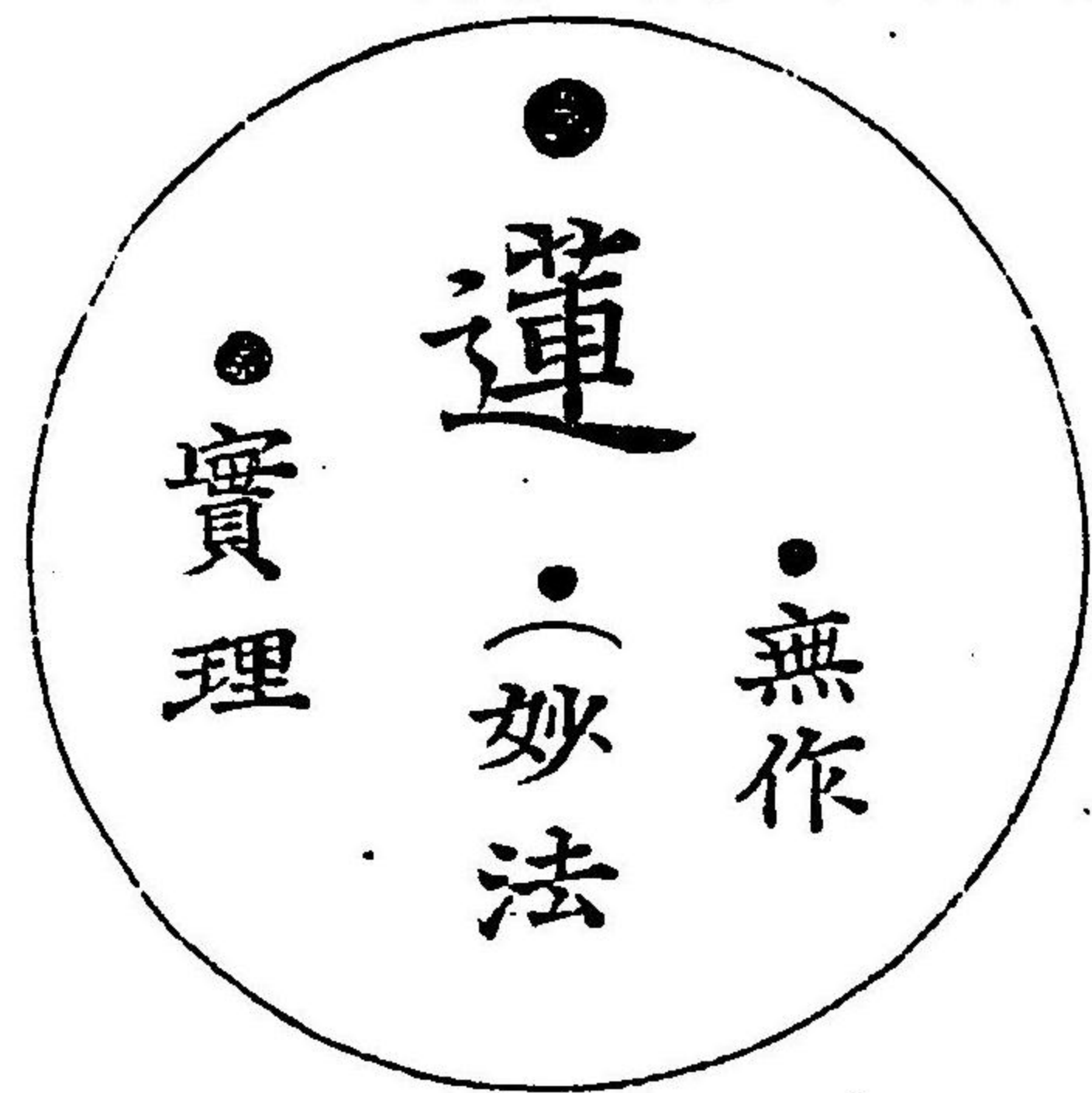
日蓮宗實理竟ぬ

日本帝國日蓮宗教者

明治廿八年十一月八日

驥尾日守著

並 常 因 果 法 相



第壹圖

○佛法一大世界論
●遍應法界實理

大 五 有 本

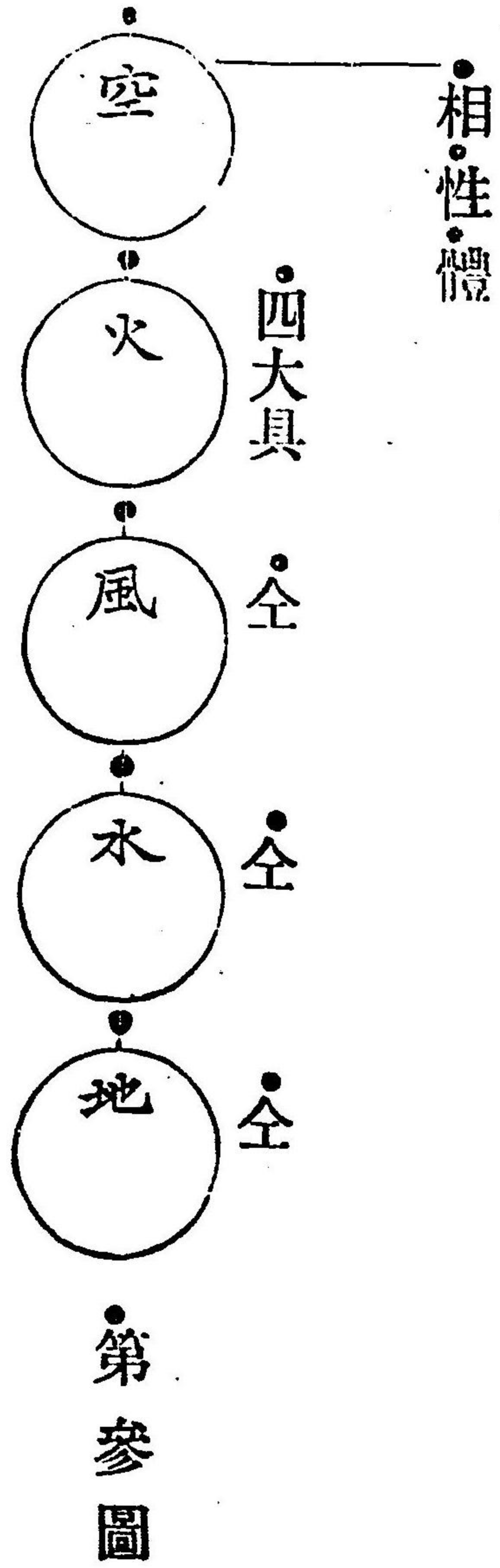
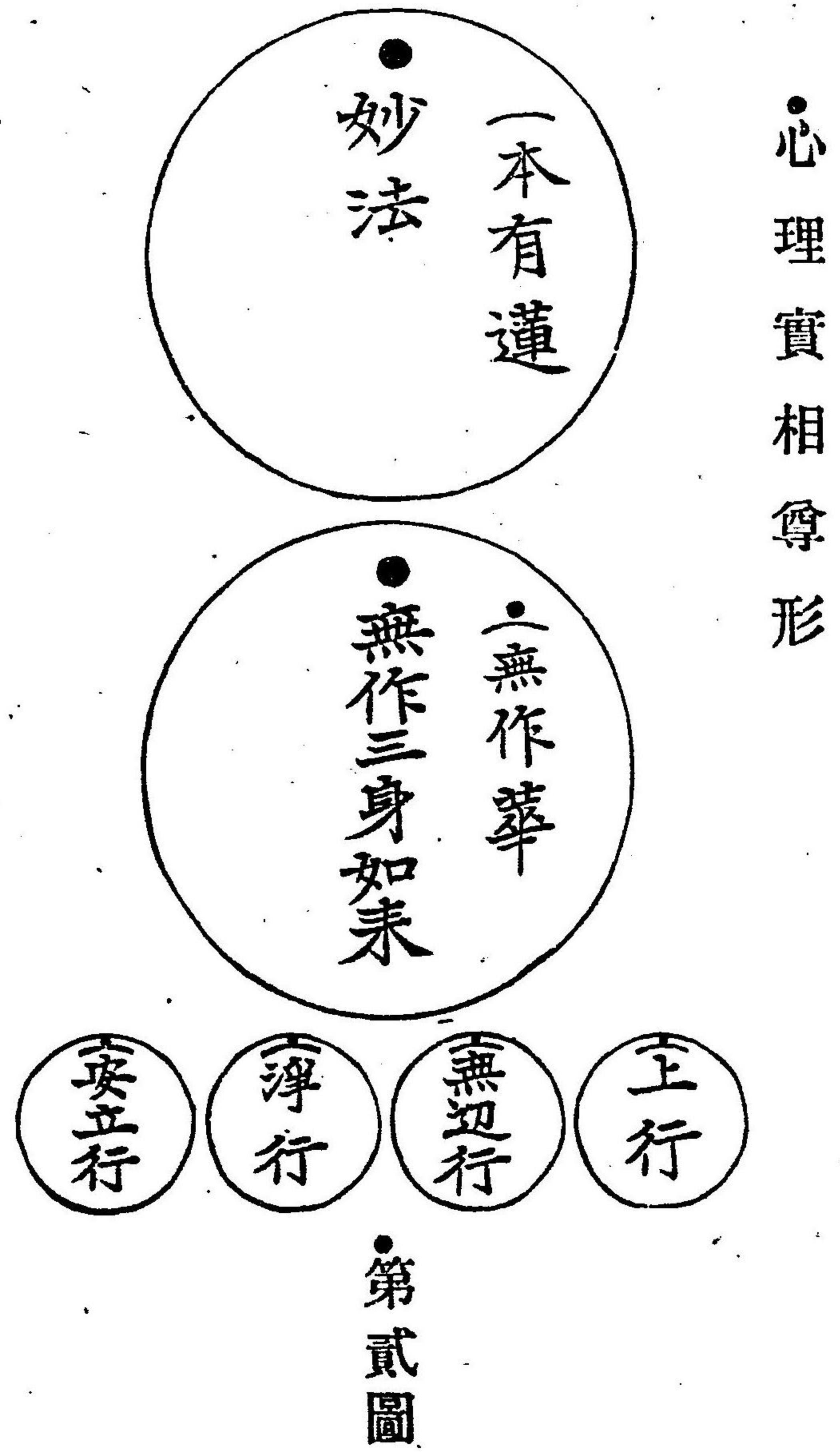


圖 立 重 五 時 本



右に圖する所の三大圖象を義解す

抑も第一圖の並常蓮華の如きは法華の體なり法相なり無始の佛法にして即ち本有五大を維持し其中に宛然住在于

次に第二圖の本時五重玄の如きは第一圖の實相尊形にして十方法界を利益するに於て常寂光より出て、十妙を顯示す即三種世間の宰主なり情非、二世間の究竟の法相たり

次に第三圖の如きは本有世間の五大にして即第二圖に支配せらる正さに五大が宛具せる不思議の用力其妙なるものは本時五重玄の主宰なるに由れり此實體なくむば本有の五大の完く功能なきものとす然りといへども世人此五大中に住しなから此五大の其用力を知るものなし此五大の本有なる義理を解せむと欲するには本時の五重玄義に據らずむば知ることを得べからざるものなり 世人が多くは人間一

身上は唯地水火風空の五大の形象にして天然自然の理より現れ出て五大の空氣を吸ふて長大となり素との五大に還歸し一つの原素の理が五大を造り五大中より人身が興出するの感覺ある耳み此他に了簡あることなし

此の奥底實相を究る處が佛智の境界にして凡眼力の届くべき所にあらず故ゆへに佛境界より既にいふ凡夫淺見の皮相境界を無常眼となすなり爰を以て凡夫は五大象中に住まて居ながら是を維持すること

を知らず 彼の天地の災天の何より來るを知らず且つ其災禍を豫防するを知らざるなり正さにしるべし豫防を知らずとは既に指す所の本有五重玄の爲めに本有五大は妙用を具足せりとゆふことを得意せざるに因るがゆへなり爾かり然ふして本有五重は本來常住の尊形なるが故是を

バ拜觀すること時機ありとす今世無教の時なれば本有の法相に歸着して即並常因果となり三種に蘊在せるものなり是を一念三千と稱す下もの圖に就て知るべし一念三千の法相となりては介爾有心即具三千といふ實理なり是即末法今時の所觀の法相といふべし日宗實理の宗致の上には是を因果一念宗と唱ふるなり此宗たるものが恒に情非二世間に住し玉ひて此を義と實とよ節約して事行する時は正さに日宗の法相三秘といへる。大事が現わるもれなりと讀者了察し玉へ

右述ぶる所は苟も 本時圓佛が過去世の自行發悟よ實相の極まで
の法相を證したるものなれば 曾て予が自作にあらず無作の一佛法
界即心理一面圖象なりとす宜しく義を以て悟るべし
件の究竟上に據りて觀る時の即ち 宇宙間の萬有日月も山川も人及

び禽獸草木一塵一質一切皆悉く 蓮華にあらざるはなし情非の二世
間の一として蓮華にあらざるはなしとす隨て 本有五重玄の心理實
相が體宰せるの佛法界なりといふ
此事相をば

五重玄如來說て曰く 非如非異不如三界見於三界如斯
之事如來明見無有錯謬等云

右經證の如く 如來が常住眼力を以て照見する時は已でに予が前に
釋せるが如く常住蓮華世界なり 若し俗諦凡見の境に依れば唯空理
界なりと云ふ 畢竟しては三世了達の如來が如實知見一大佛法世界
論なりと結論するなり以上は日宗實理の哲理を票証したる者也

絕待心因 絕待心果

●日宗家の一念三千を表示す

●内證壽量

●妙法五字

●因果二法

●外用壽量

●無作三身

右は本來本有の佛法不可知の大法たり今世人衆か爲めに必用とす

●日蓮宗研究問題

- 一 今世末法時機に際しては前佛釋迦應身如來が所説の教卷用否取扱方之事
- 一 惣して人本尊を云ひ法本尊を云ふ此人法何れか正意に決するや亦他義ありや如何の事
- 一 末法今世は因を表とするや果を表とするや其表裏如何の事
- 一 本果妙の時の成佛と本因妙の時の成佛と同異如何
- 一 三大秘法健立用否如何
- 一 三大秘法了簡取扱方之事理如何の事

右は門内に約し門外に約するの論題なり是を論究するに彼の正像過時の教理は今日敢てせず末法直機の話理を要す

明治廿八年十二月廿五日 日印刷
明治廿八年十二月廿六日 日發行

定價金四拾錢

著 者

驥尾日守
京都市五條東六丁目二十四番地

發行者

驥尾日守門人
金本龍三郎
島根縣松江市灘町百三十三番地

印刷者

堀熊太郎
全縣全市松江分七百六十一番屋敷

發賣所

日本玄宗大同團附屬
報光社
松江市殿町三百九十七番地

印刷所

報光社活版部

特約賣捌所

鴻盟社
書肆

今村金次郎
東京市芝區露月町十八番地

哲學書院

東京市本郷區本郷六丁目五番地

村上勘兵衛

京都市上京區第廿九組墨筆院前町九番戶

有斐堂

有田傳助

松江市末次本町七十二番地

博向堂

岩代國福島町

武内彌三郎

岡山市西大寺町

賣捌所

京都 田中治兵衛

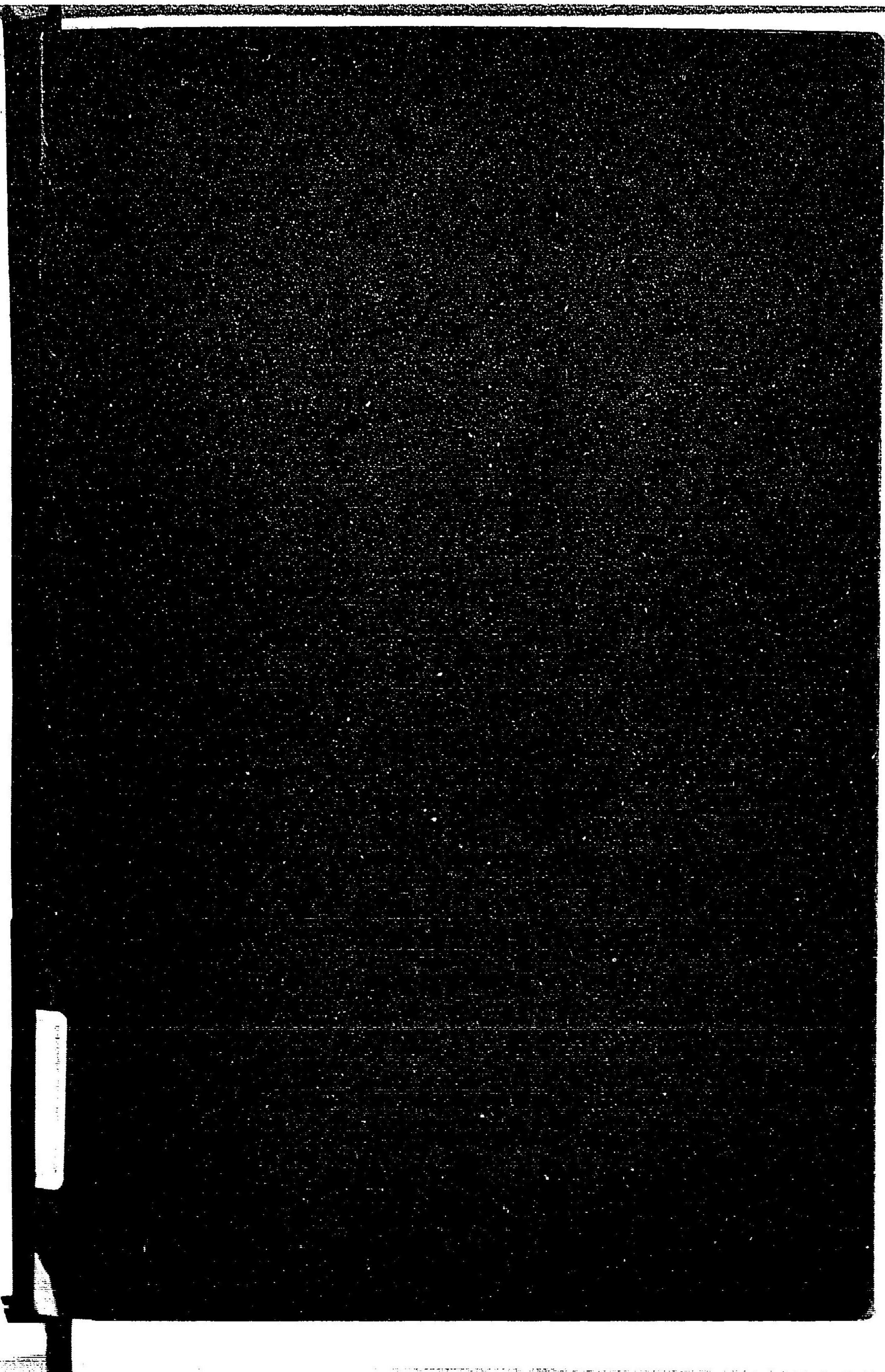
廣島 積善館支店

大坂 吉岡平助

伯州米子 今井兼文

石州濱田 安達幾太郎

熊本 長崎次郎



Small, illegible text or label on the left edge of the dark area.